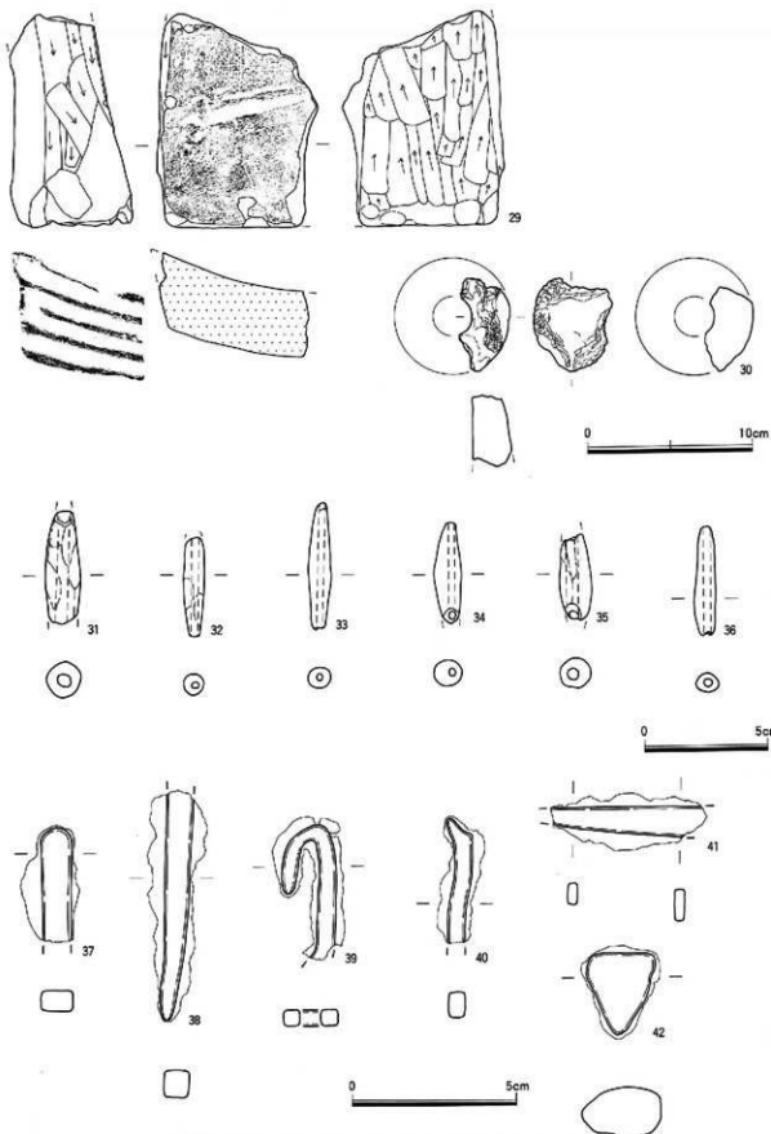
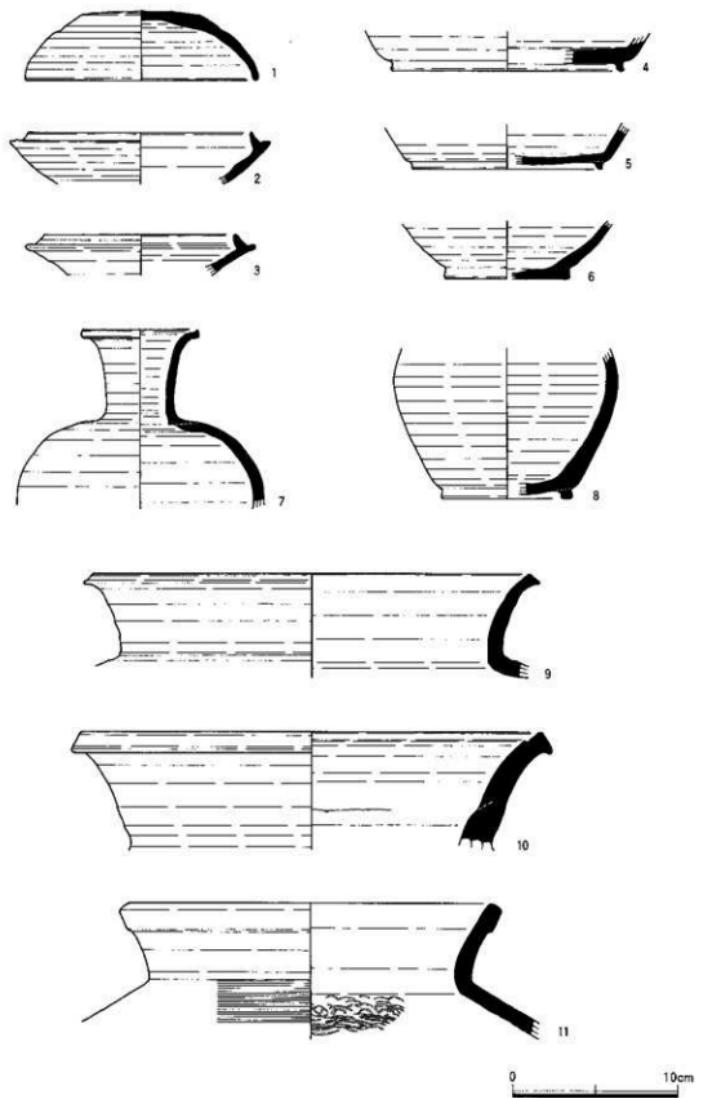


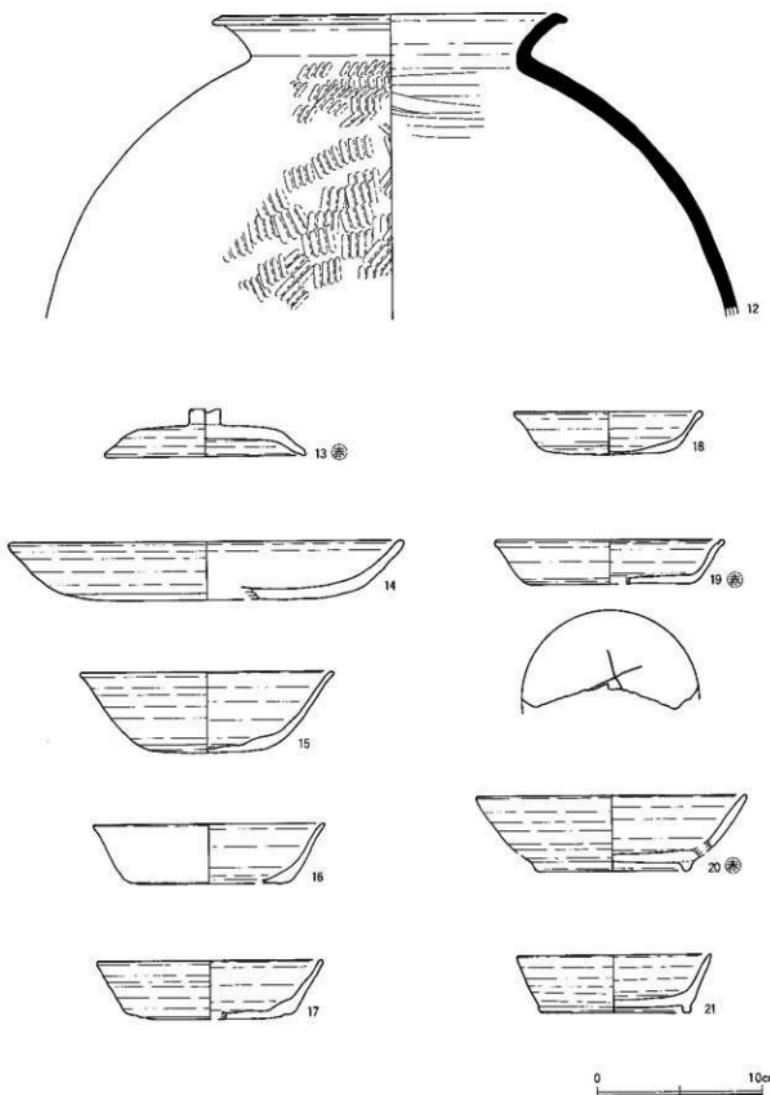
第1017図 1998年度 8区包含層 出土遺物（2）



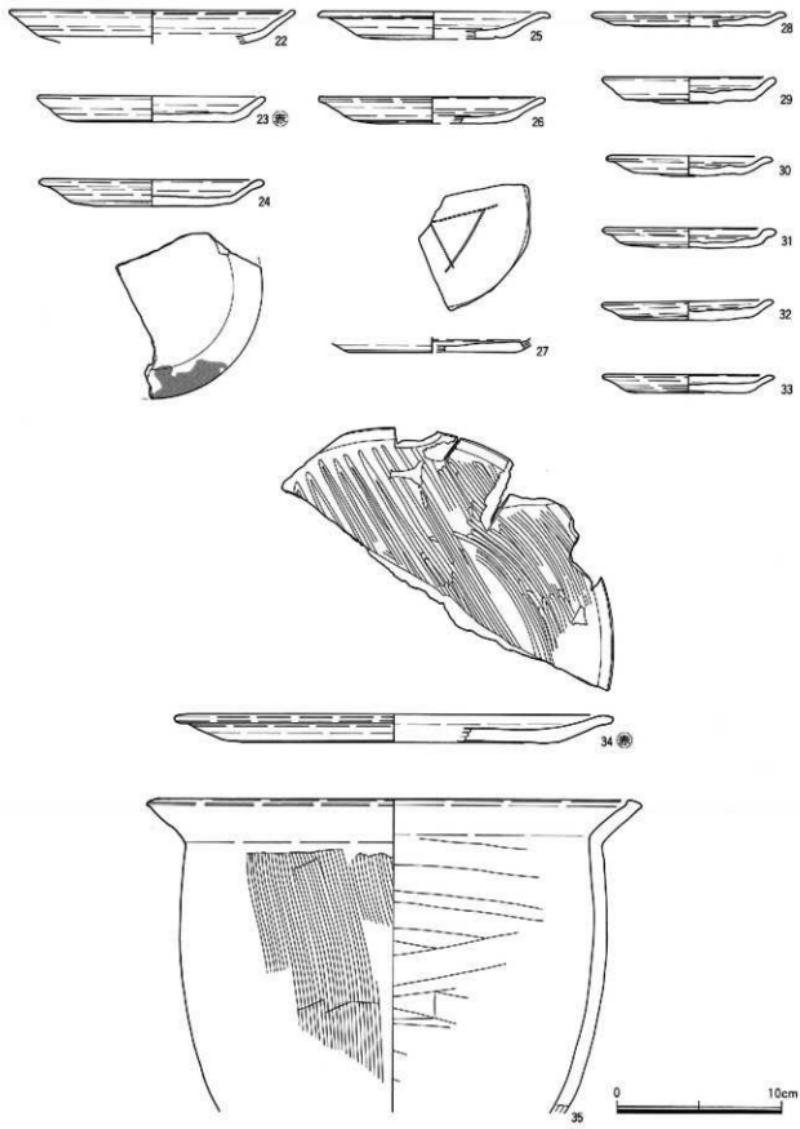
第1018図 1998年度 8区包含層 出土遺物 (3)



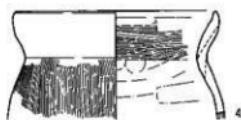
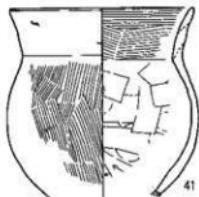
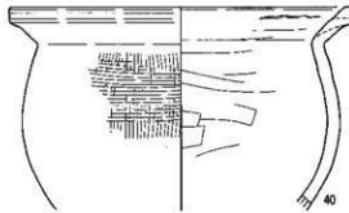
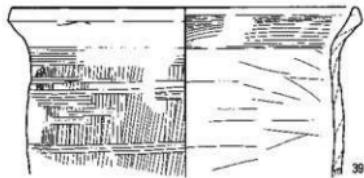
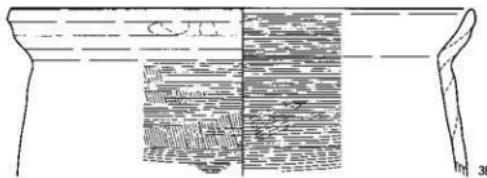
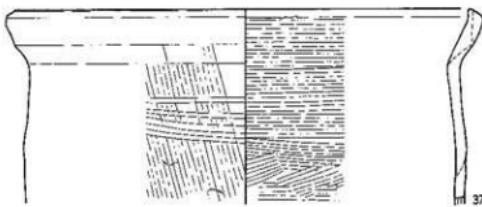
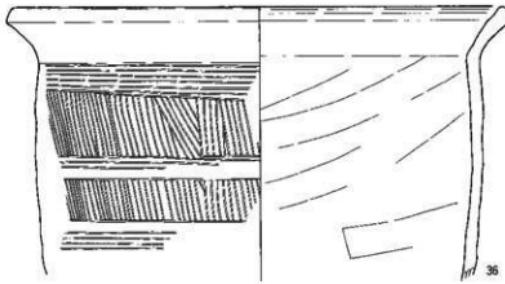
第1019図 1999年度 5区包含層 出土遺物 (1)



第1020図 1999年度 5区包含層 出土遺物（2）

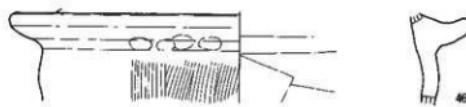
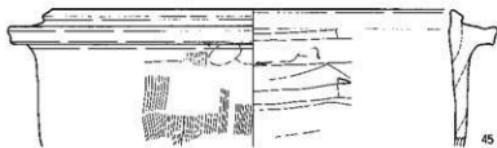
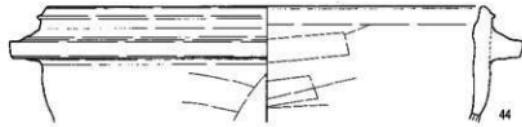


第1021図 1999年度 5区包含層 出土遺物 (3)

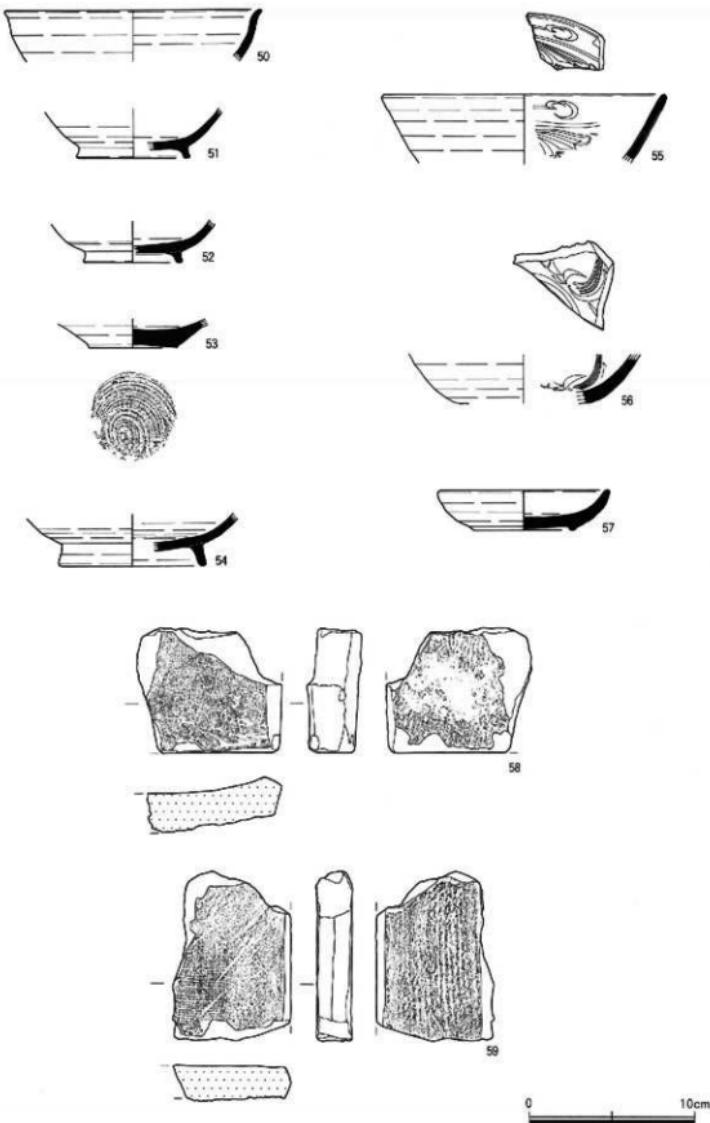


0 10cm

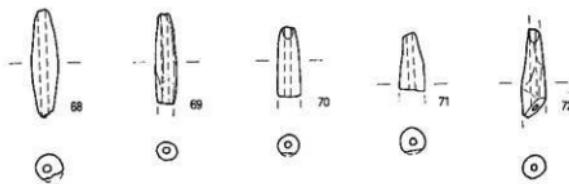
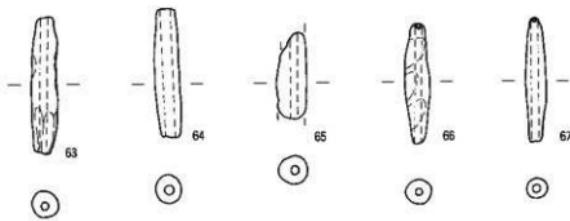
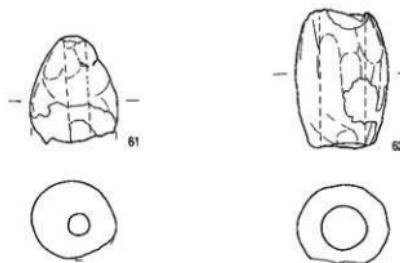
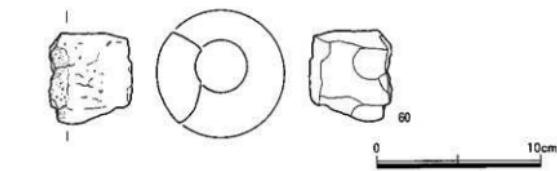
第1022図 1999年度 5区包含層 出土遺物 (4)



第1023図 1999年度 5区包含層 出土遺物 (5)

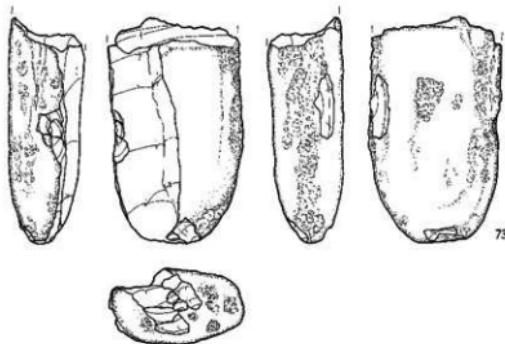


第1024図 1999年度 5区包含層 出土遺物 (6)

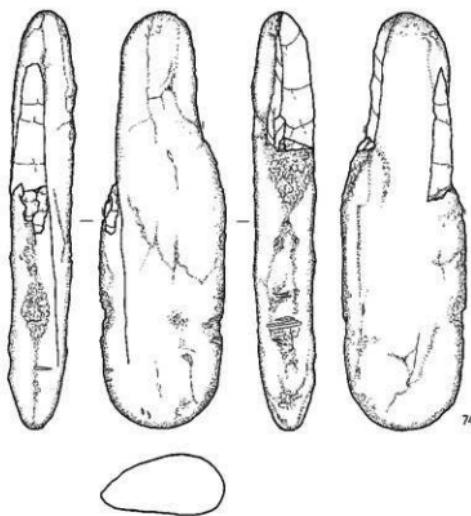


0 5cm

第1025図 1999年度 5区包含層 出土遺物 (7)



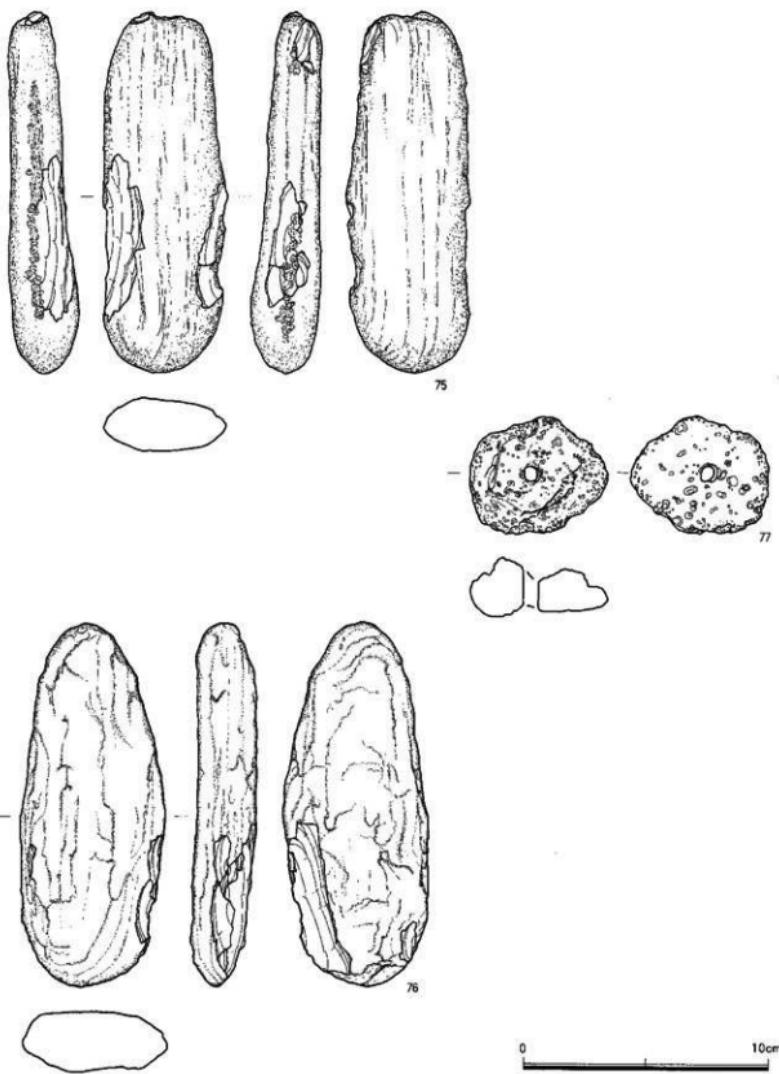
73



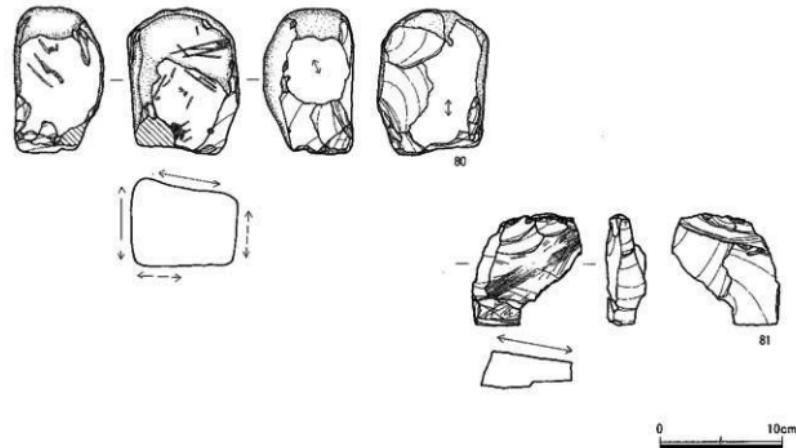
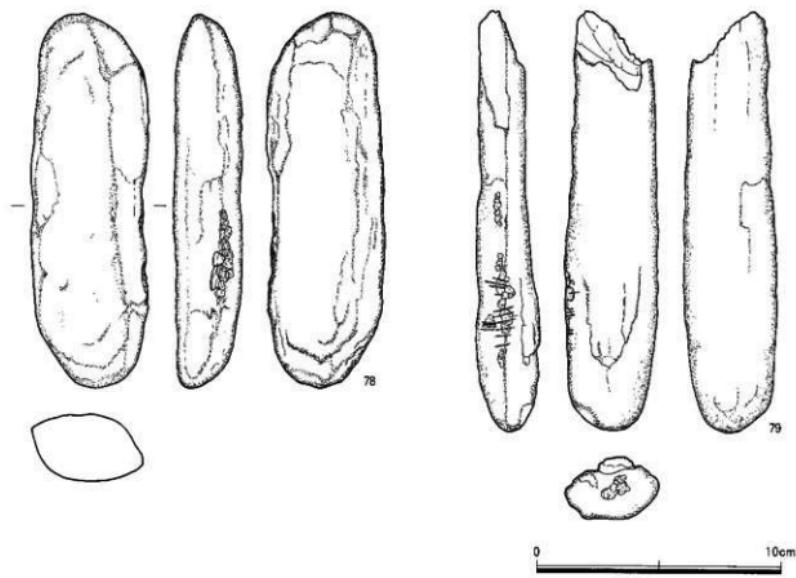
74



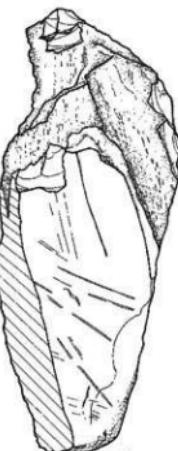
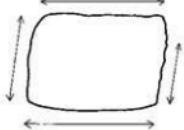
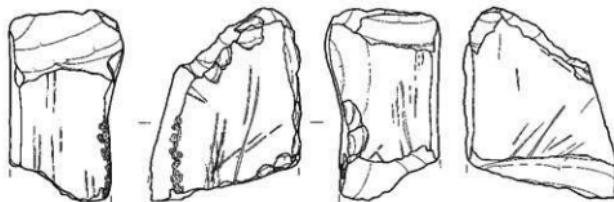
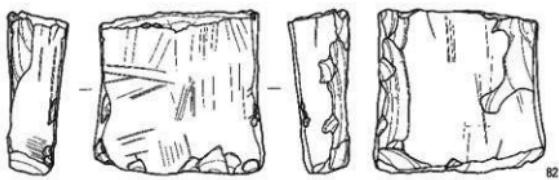
第1026図 1999年度 5区包含層 出土遺物 (8)



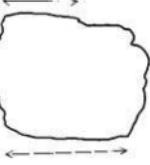
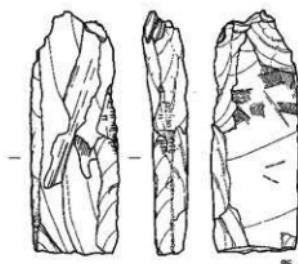
第1027図 1999年度 5区包含層 出土遺物 (9)



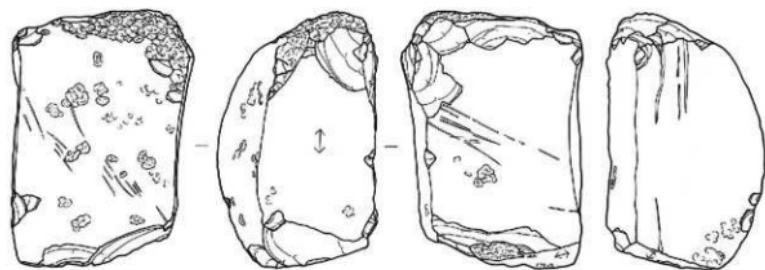
第1028図 1999年度 5区包含層 出土遺物 (10)



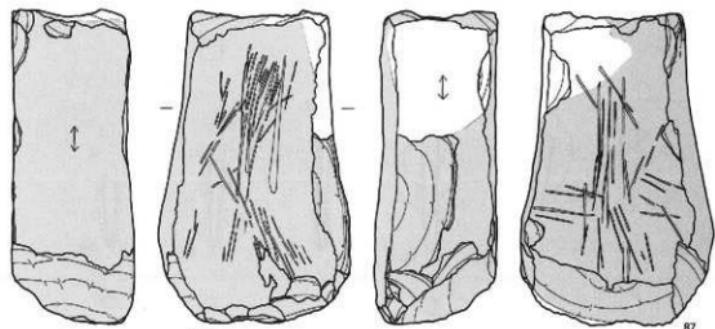
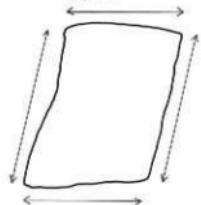
84



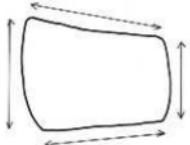
第1029図 1999年度 5区包含層 出土遺物 (11)



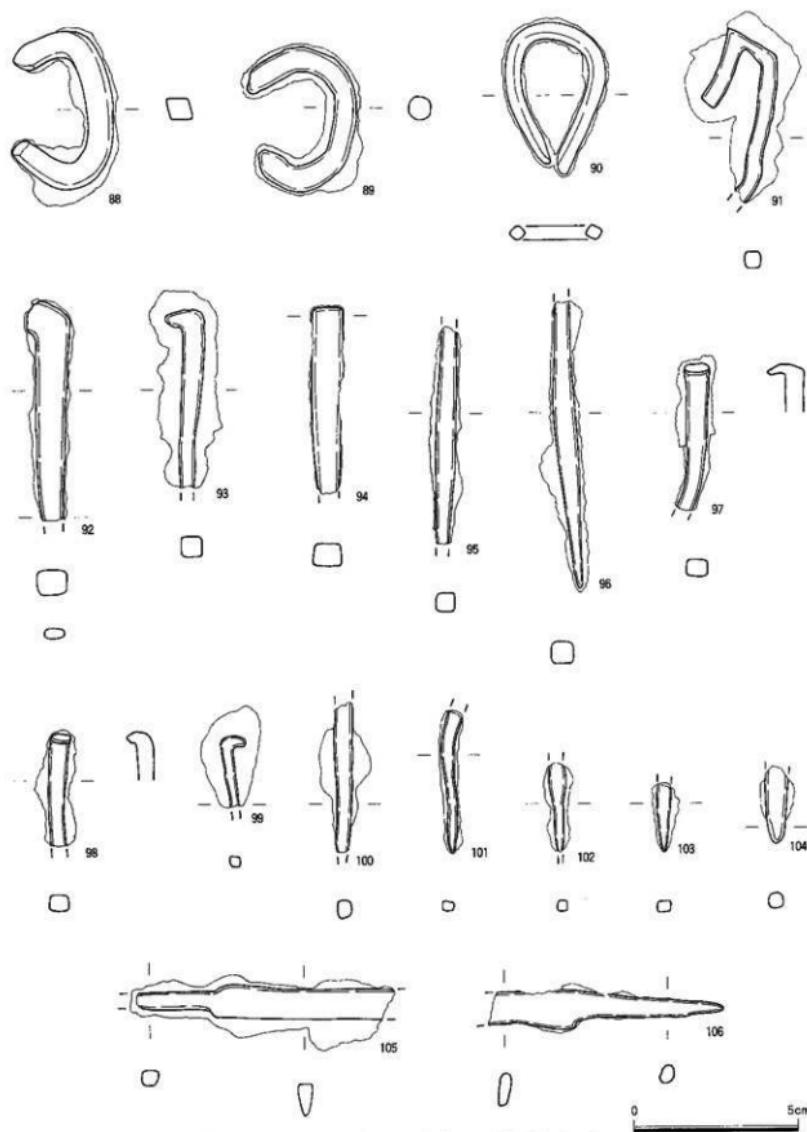
86



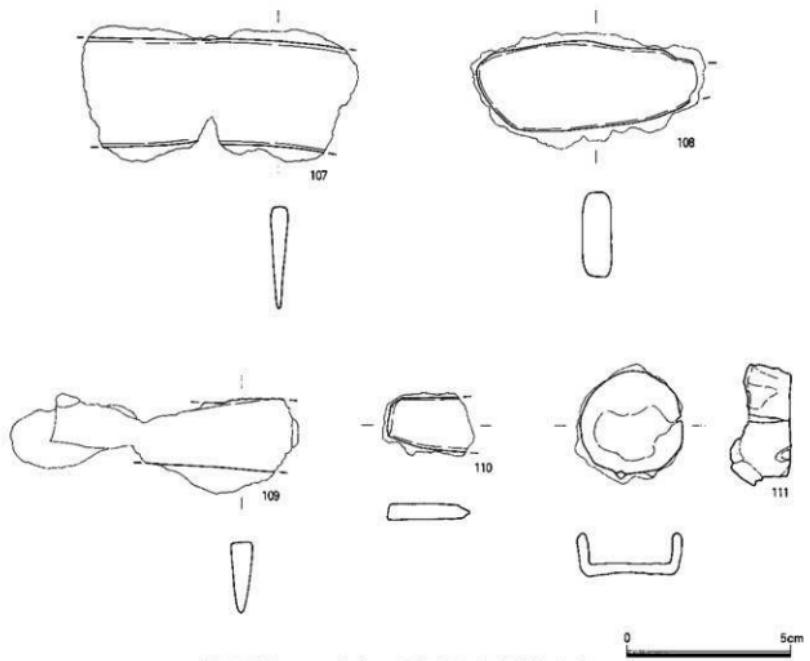
87



第1030図 1999年度 5区包含層 出土遺物 (12)



第1031図 1999年度 5区包含層 出土遺物 (13)



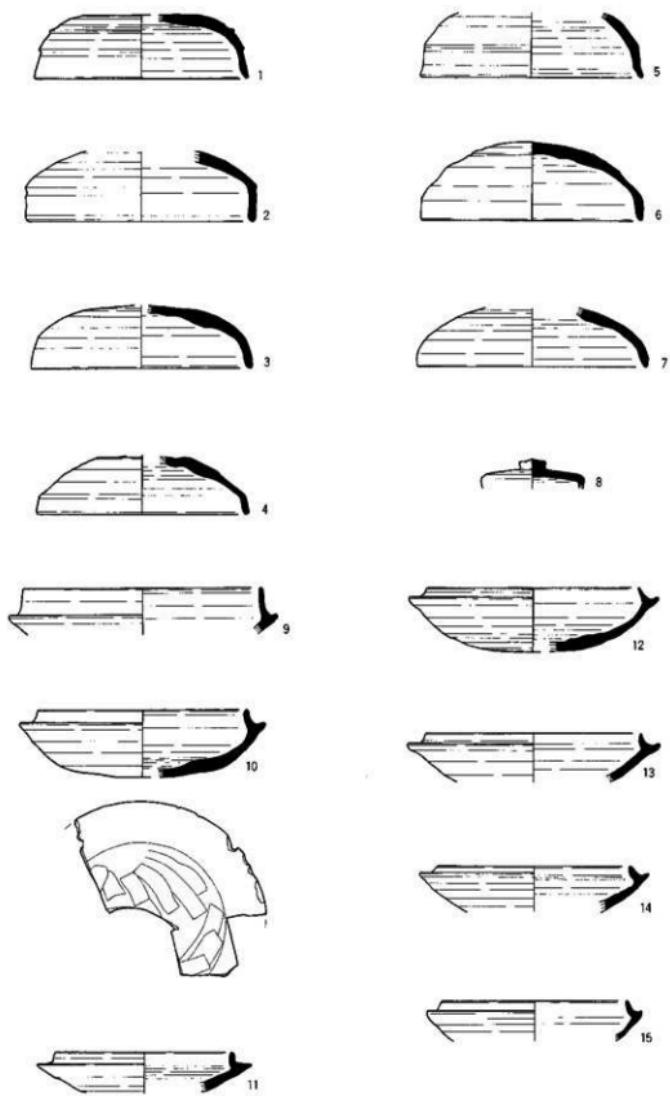
第1032図 1999年度 5区包含層 出土遺物 (14)

2003年度 3-1区 (第1033~1041図)

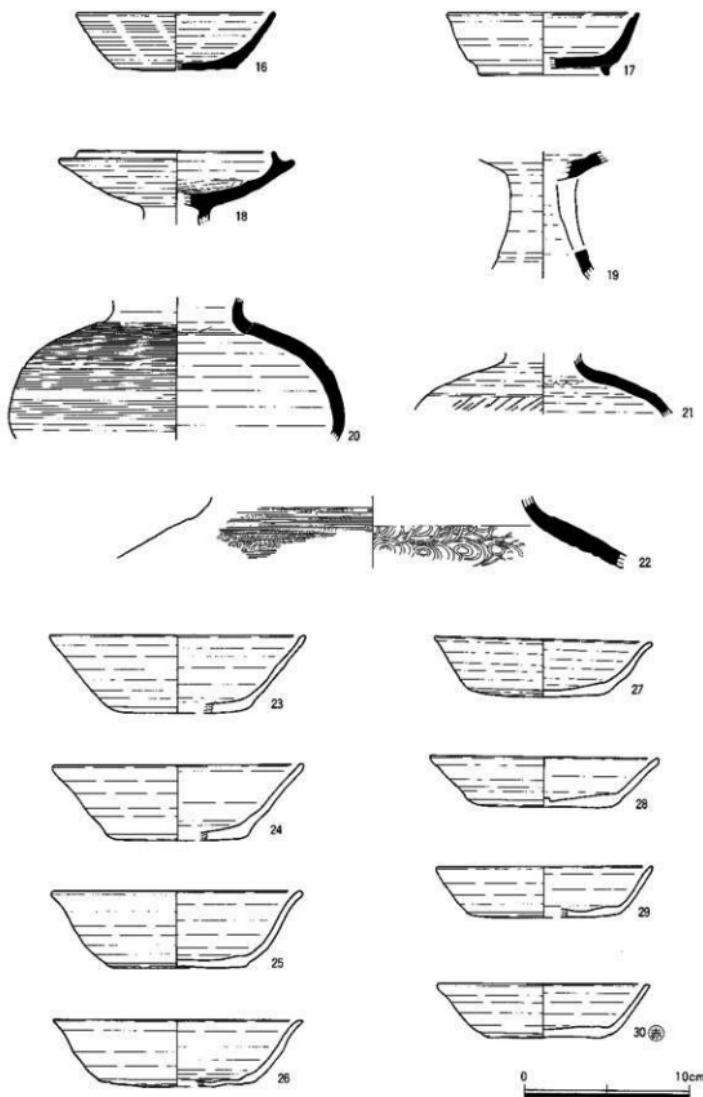
1~8は須恵器の蓋である。9~17は須恵器の杯である。18・19は須恵器の高杯である。20・21は須恵器の壺である。22は須恵器の甕である。23~46は土師器の杯である。47~55は土筒器の皿である。56~65は土師器の甕である。66は土師器の羽笠である。67は土師器の瓶である。68~70は製塙土器である。71は黒色土器の皿である。72~74は黒色土器の碗である。75は半瓦である。76~80は土錘である。81は結晶片岩の紡錘車である。82~84は砥石である。85・86は鉄製の刀子である。87~89は鉄製の鎌である。90は鉄鎌である。91~98は鉄釘である。

2003年度 3-2区 (第1042~1044図)

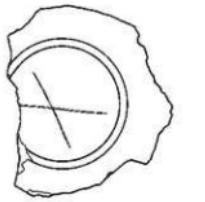
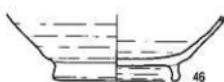
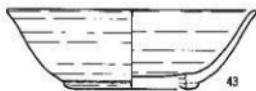
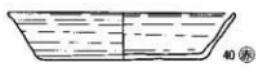
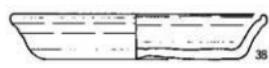
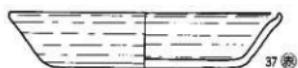
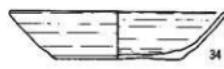
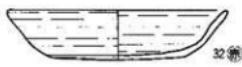
1は須恵器の蓋である。2~8は須恵器の杯である。9は須恵器の壺である。10~12は須恵器の甕である。13は土師器の杯である。14~16は土師器の皿である。17~19は土師器の甕である。20は土師器の羽笠である。21は丸瓦である。22は甕である。23は土錘である。24は砥石である。



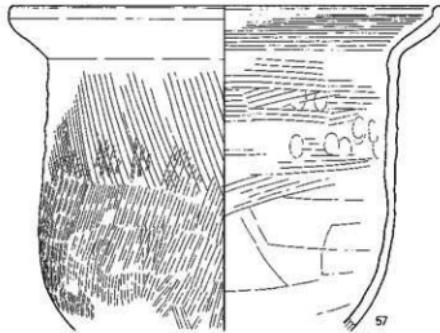
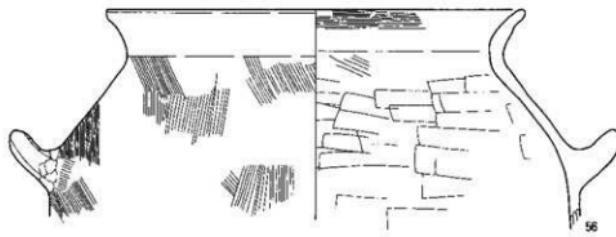
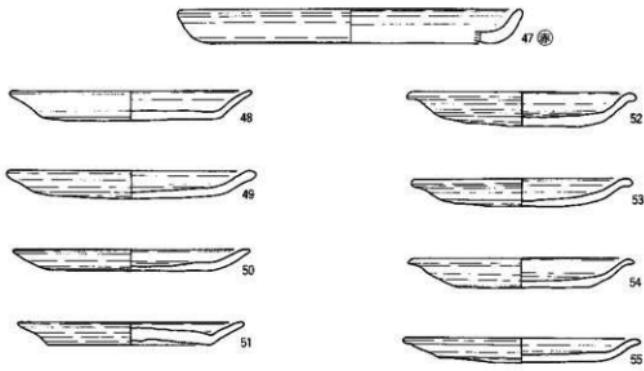
第1033図 2003年度 3-1区包含層 出土遺物 (1)



第1034図 2003年度 3-1区包含層 出土遺物（2）



第1035図 2003年度 3-1区包含層 出土遺物 (3)

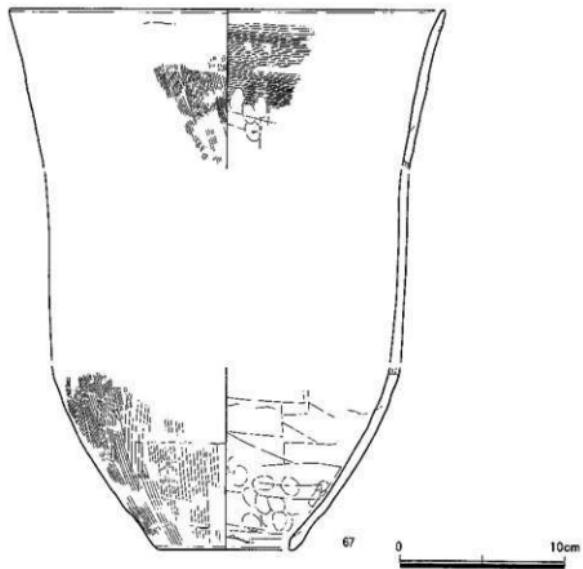
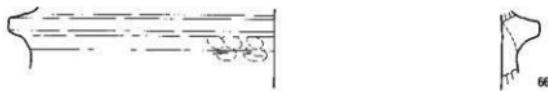
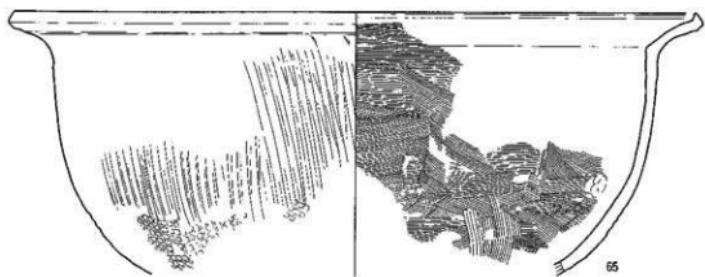


0 10cm

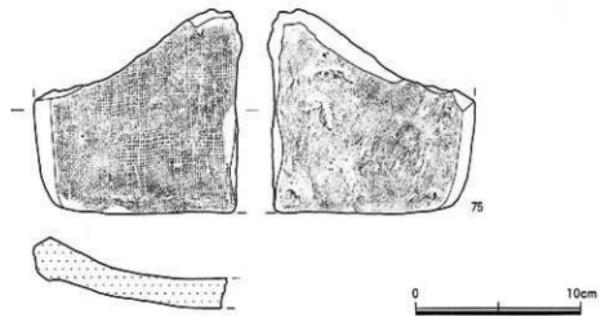
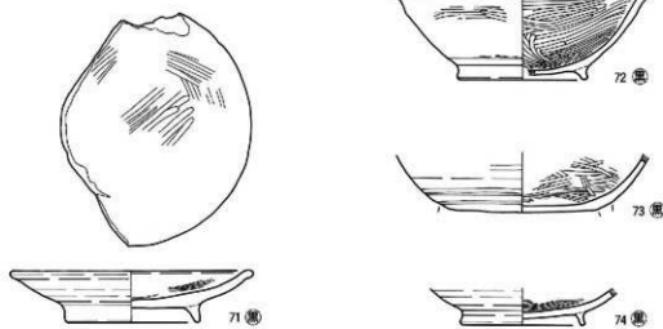
第1036図 2003年度 3-1区包含層 出土遺物 (4)



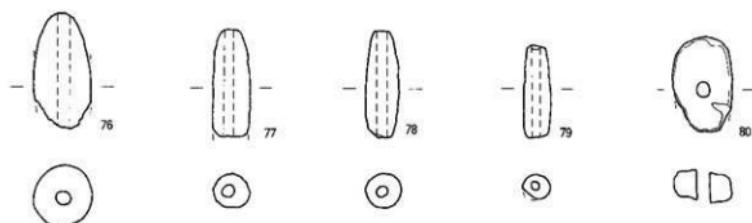
第1037図 2003年度 3-1区包含層 出土遺物 (5)



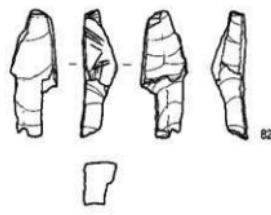
第1038図 2003年度 3-1区包含層 出土遺物 (6)



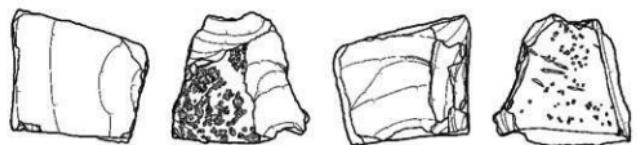
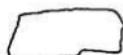
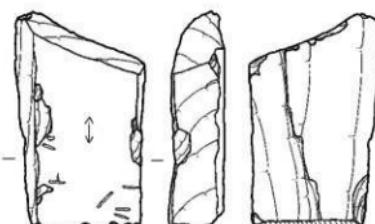
第1039図 2003年度 3-1区包含層 出土遺物（7）



0 5cm

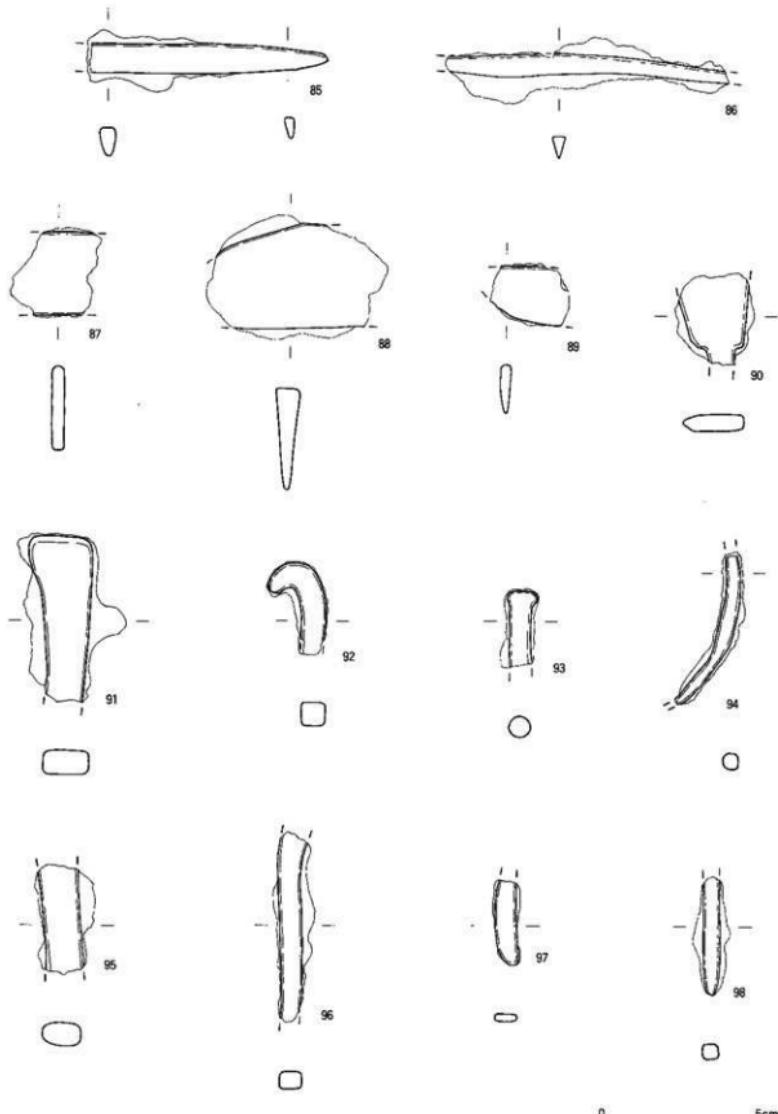


0 5cm

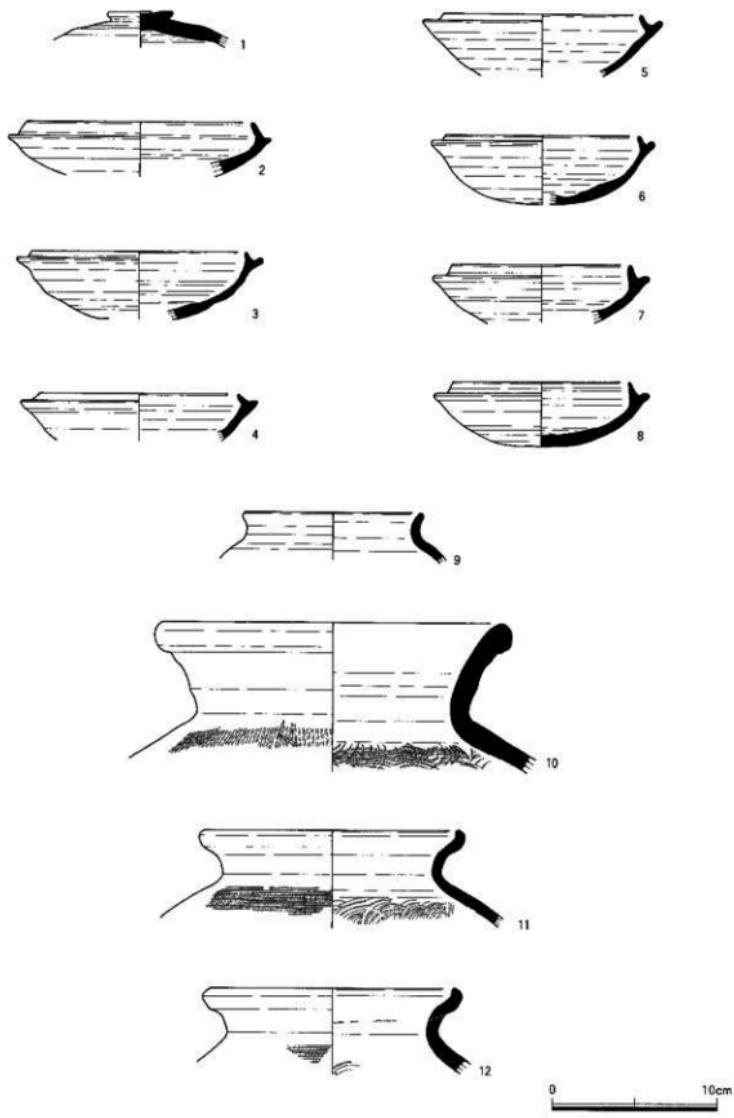


0 10cm

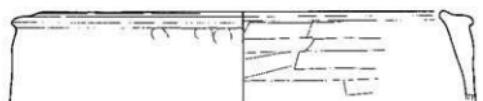
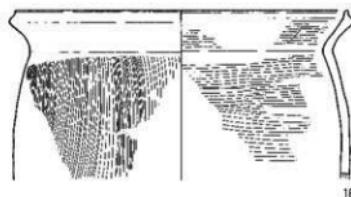
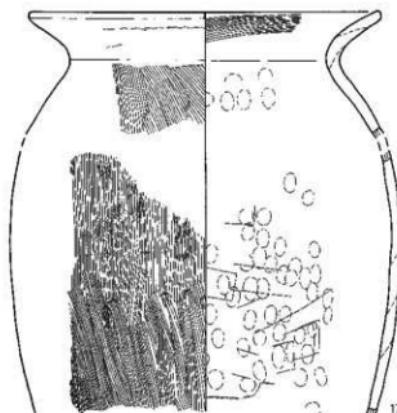
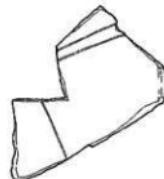
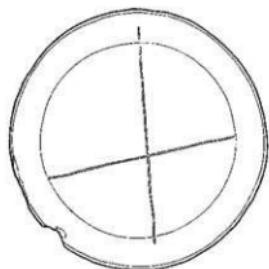
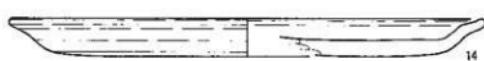
第1040図 2003年度 3-1区包含層 出土遺物 (8)



第1041図 2003年度 3-1区包含層 出土遺物 (9)

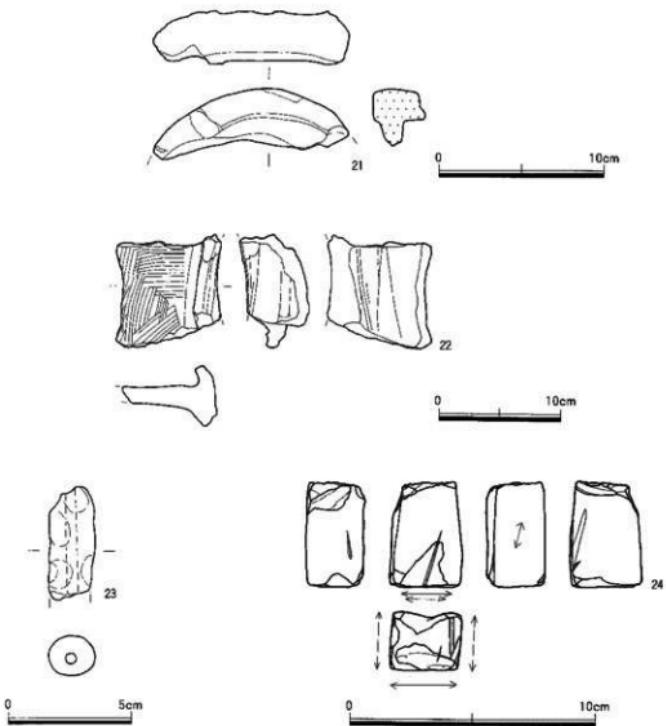


第1042図 2003年度 3-2区包含層 出土遺物 (1)



0 10cm

第1043図 2003年度 3-2区包含層 出土遺物 (2)



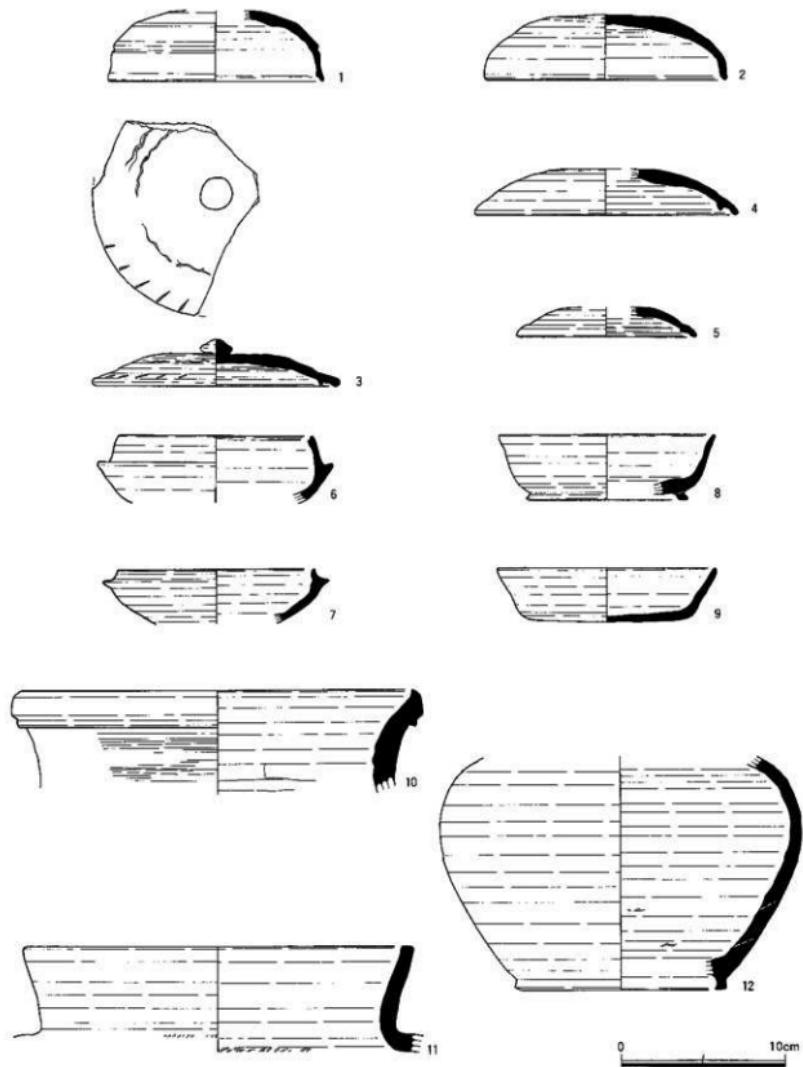
第1044図 2003年度 3-2区包含層 出土遺物（3）

2003年度 3-3区（第1045~1048図）

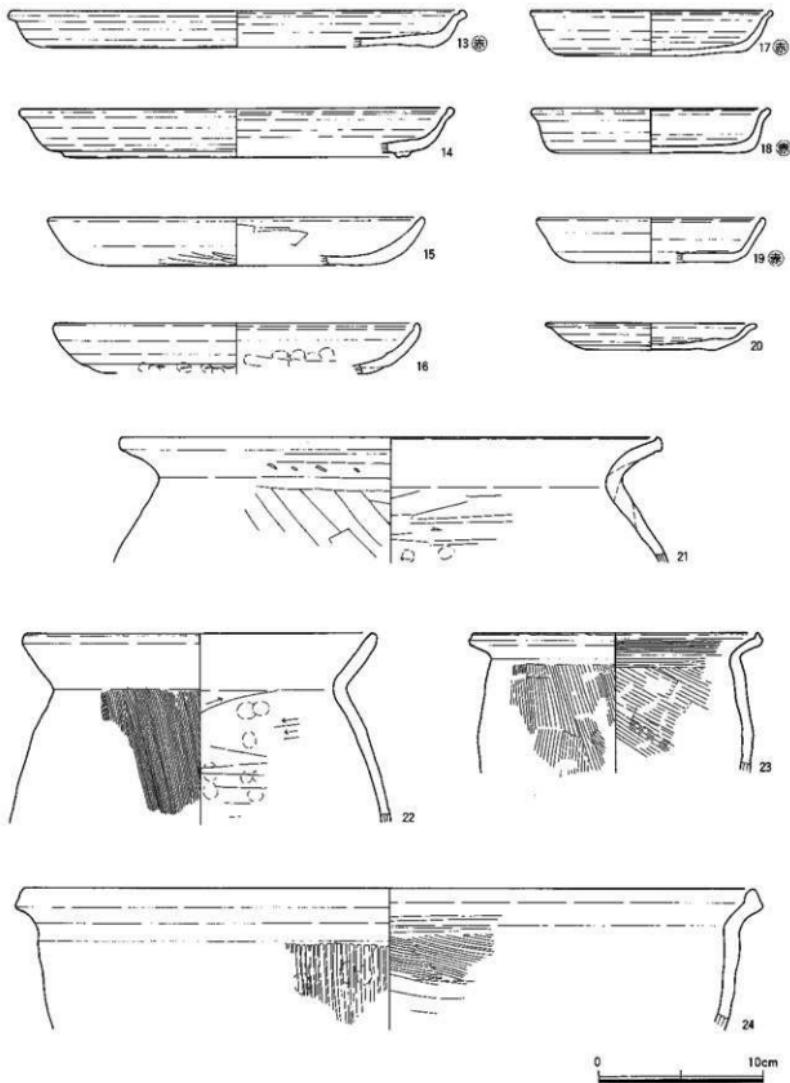
1~5は須恵器の蓋である。6~9は須恵器の杯である。10・11は須恵器の壺である。12は須恵器の盃である。13~20は土師器の皿である。21~23は土師器の壺である。24は土師器の鍋である。25~36は製塙土器である。37~40は土錐である。41は砥石である。42は鉄製の鎌である。43は鉄製の刀子である。44~47は鉄釘である。

1998年度 9区（第1049図）

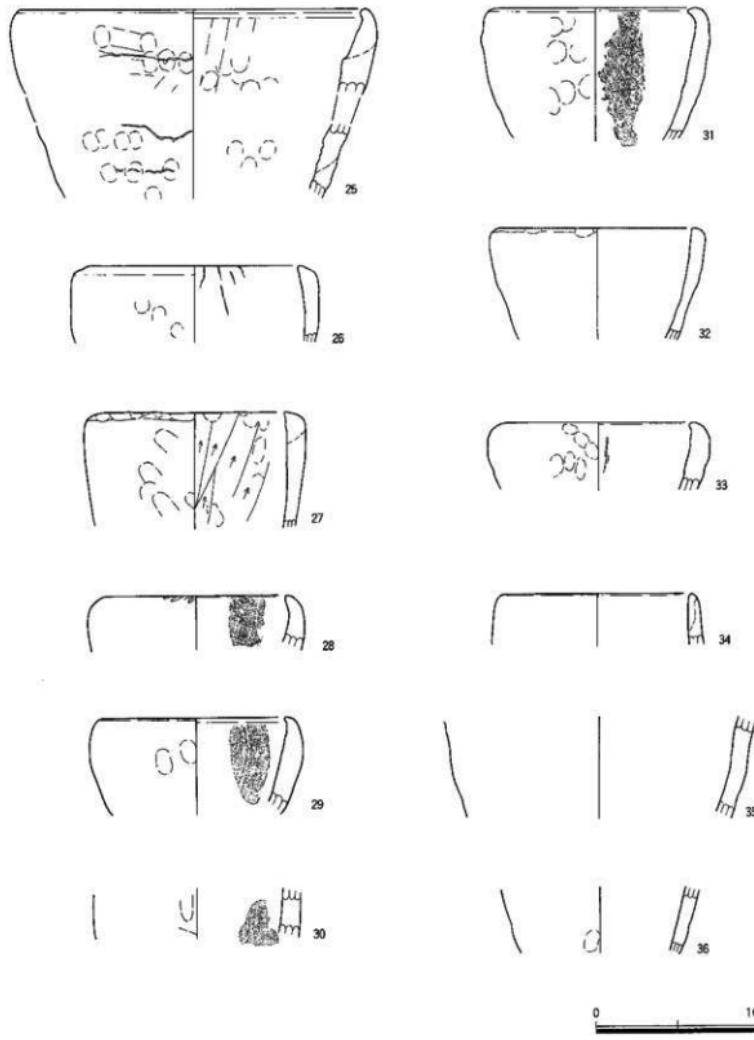
1は須恵器の杯である。2は須恵器の壺である。3~6は土師器の皿である。7・8は丸瓦である。9~14は上鉢である。15は用途不明の鉄器である。16・17は鉄製の刀子である。



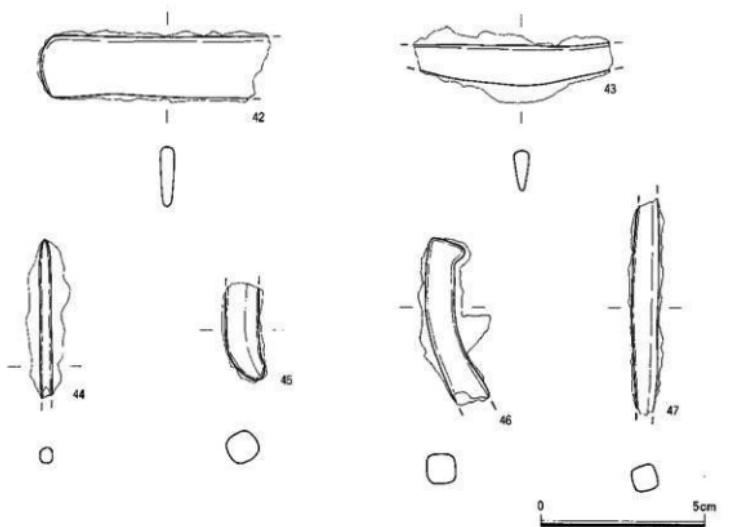
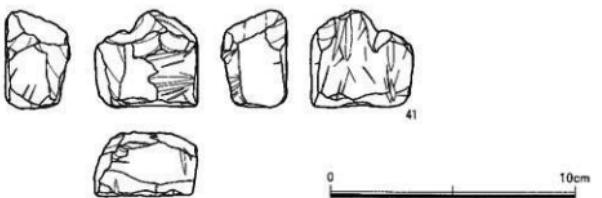
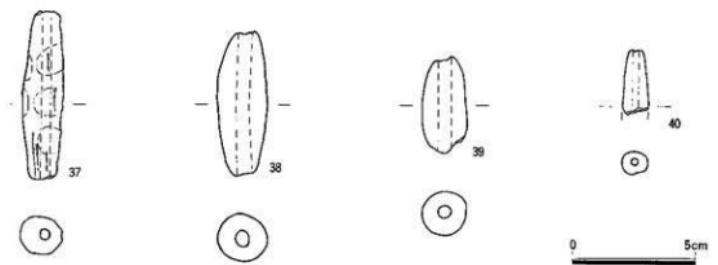
第1045図 2003年度 3-3区包含層 出土遺物（1）



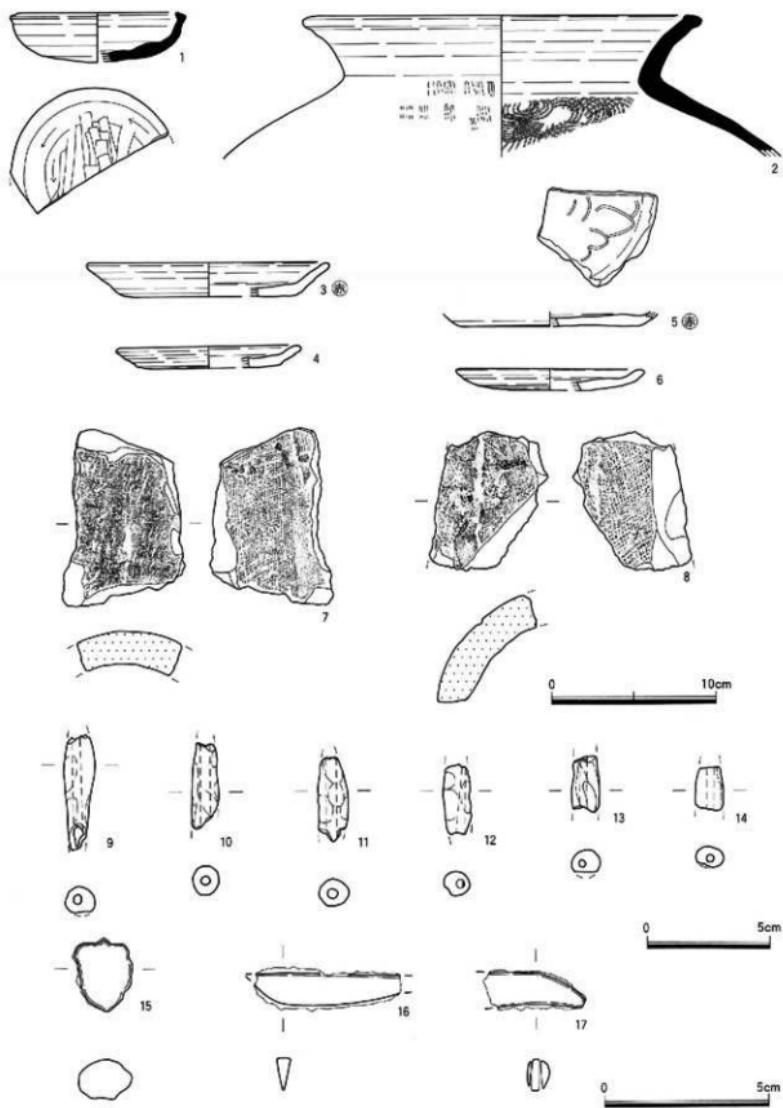
第1046図 2003年度 3-3区包含層 出土遺物 (2)



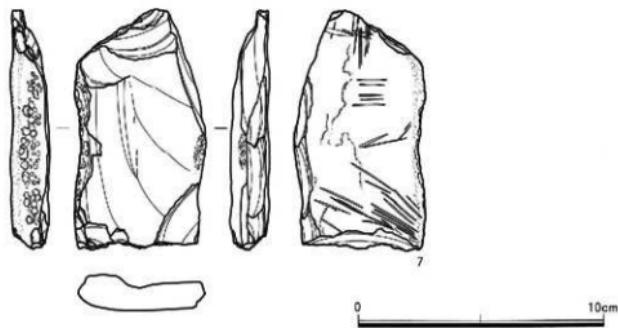
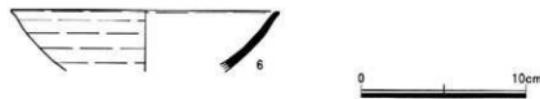
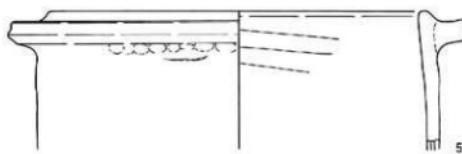
第1047図 2003年度 3-3区包含層 出土遺物 (3)



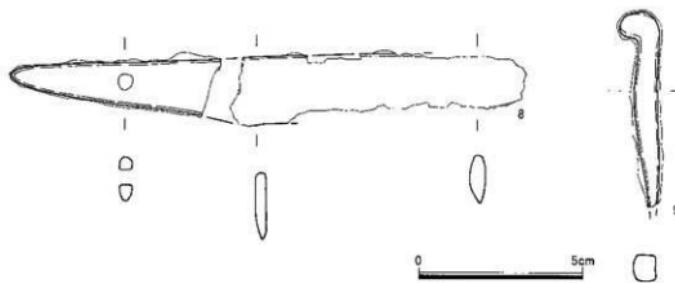
第1048図 2003年度 3-3区包含層 出土遺物 (4)



第1049図 1998年度 9区包含層 出土遺物



第1050図 2003年度 4-1区包含層 出土遺物 (1)



第1051図 2003年度 4-1区包含層 出土遺物（2）

2003年度 4-1区（第1050・1051図）

1は須恵器の高杯である。2・3は須恵器の壺である。4は上師器の皿である。5は土師器の羽釜である。6は白磁の碗である。7は砥石である。8は鉄製の刀子である。9は鉄釘である。

2003年度 4-2区（第1052~1058図）

1~3は須恵器の杯である。4は須恵器の高杯である。5・6は須恵器の壺である。7~15は土師器の杯である。16~30は土師器の皿である。31は土師器の高杯である。32は土師器の鍋である。33・34は土師器の壺である。35~37は製塙上器である。38~40は青磁の碗である。41は瀬戸焼の花瓶である。42・43は備前焼の擂鉢である。44~45は陶器の壺である。46は備前焼の壺である。47~49は平瓦である。50~54は上鍤である。55は置き壺である。56は刃口である。57~63は用途不明の土製品である。64は結晶片岩製の紡錘車である。65は翫である。66~68は鉄釘である。69・70は鉄製の鎌である。71・72は鉄製の刀子である。

2003年度 4-3区（第1059図）

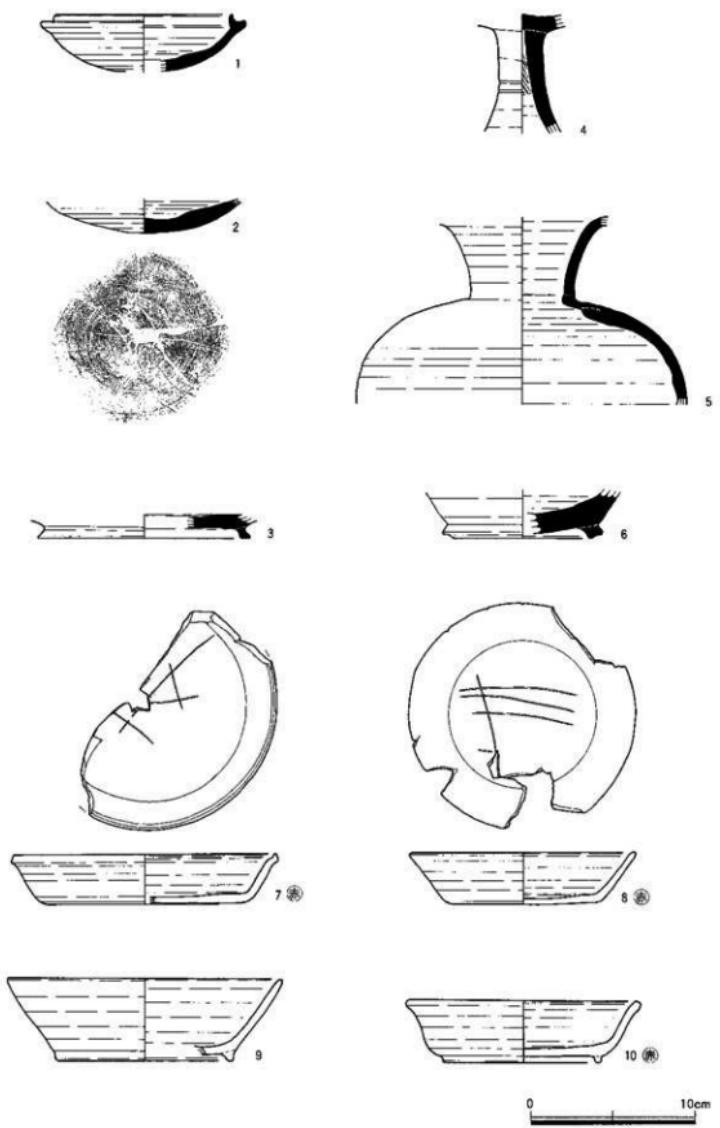
1・2は須恵器の杯である。3・4は須恵器の壺である。5は土師器の杯である。6は陶器の擂鉢である。7・8は陶器の碗である。9・10は染付の皿である。11・12は銭貨「寛永通寶」である。13~15は板状の鐵器である。16~18は鉄釘である。

2003年度 4-4区（第1060図）

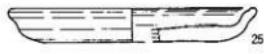
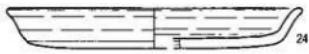
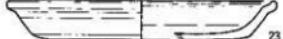
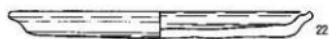
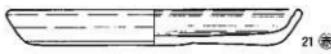
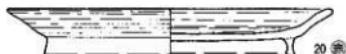
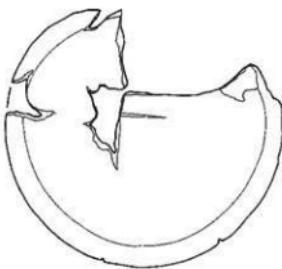
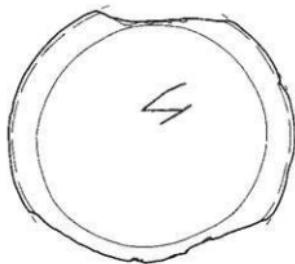
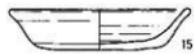
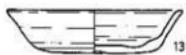
1は須恵器の蓋である。2~4は須恵器の杯である。5は土師器の杯である。6は土師器の皿である。7は平瓦である。8は竈である。9~13は鉄釘である。

2006年度 2区（第1061図）

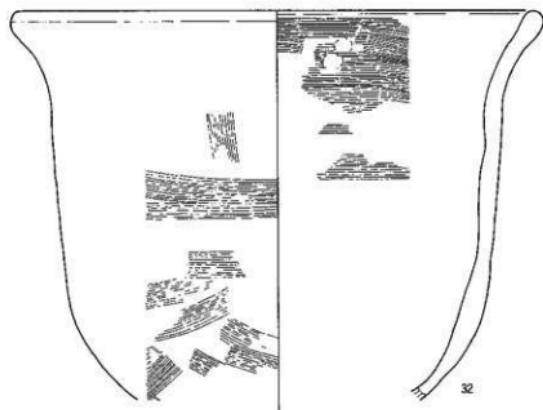
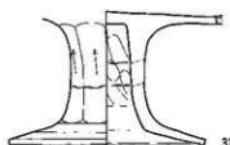
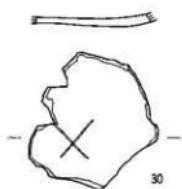
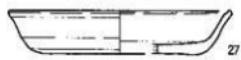
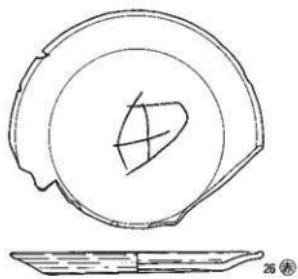
1は須恵器の蓋である。2は須恵器の壺である。3は土師器の皿である。4は土師器の壺である。5は黒色土器の椀である。6は陶器の椀である。7は青磁の碗である。



第1052図 2003年度 4-2区包含層 出土遺物 (1)

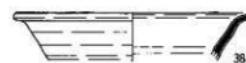
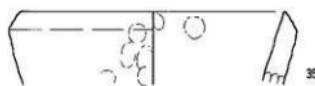
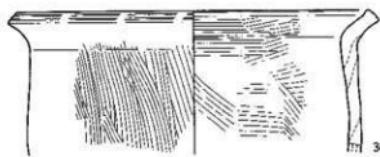
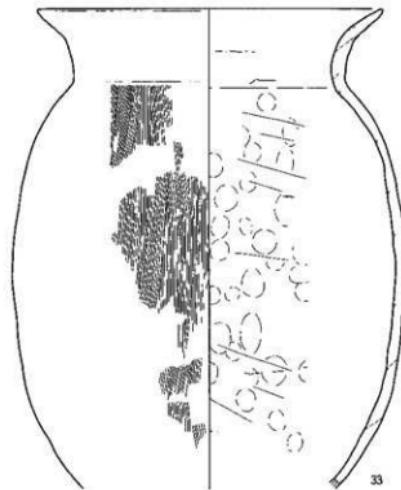


第1053図 2003年度 4-2区包含層 出土遺物 (2)



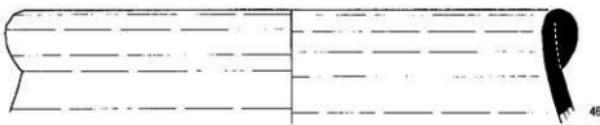
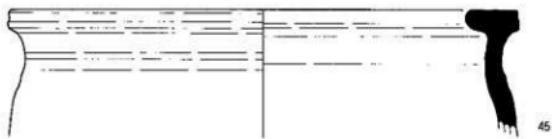
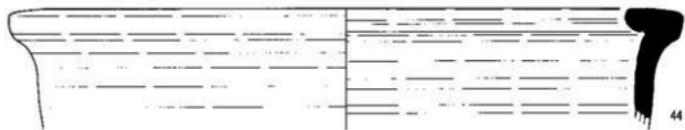
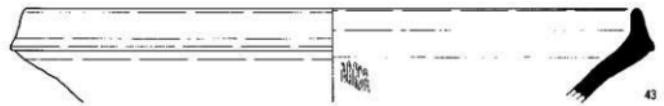
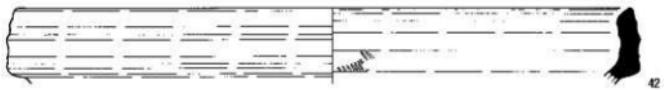
0 10cm

第1054図 2003年度 4-2区 包含層 出土遺物 (3)



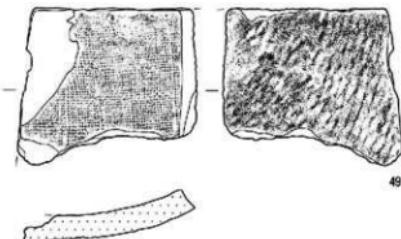
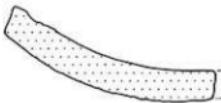
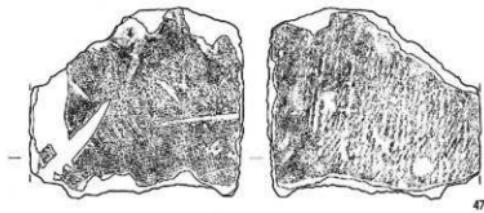
0 10cm

第1055図 2003年度 4-2区包含層 出土遺物 (4)

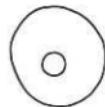
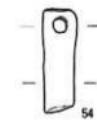
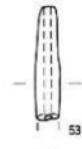
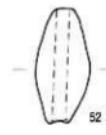
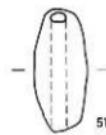
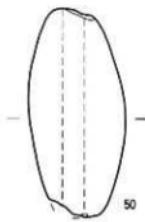


0 10cm

第1056図 2003年度 4-2区包含層 出土遺物 (5)

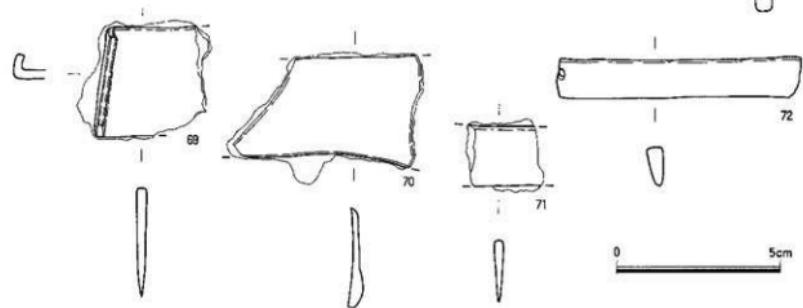
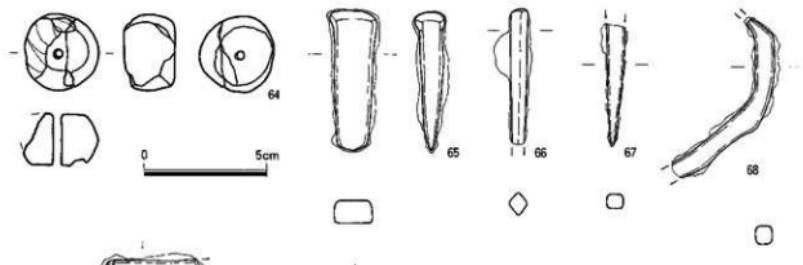
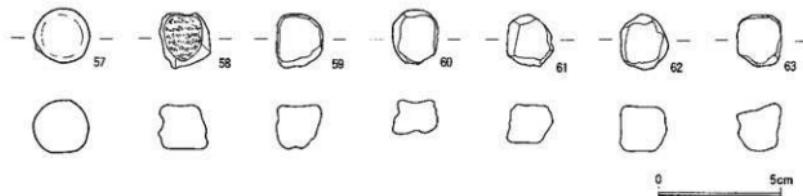
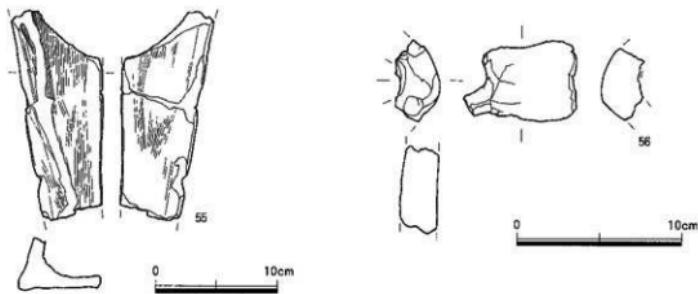


0 10cm

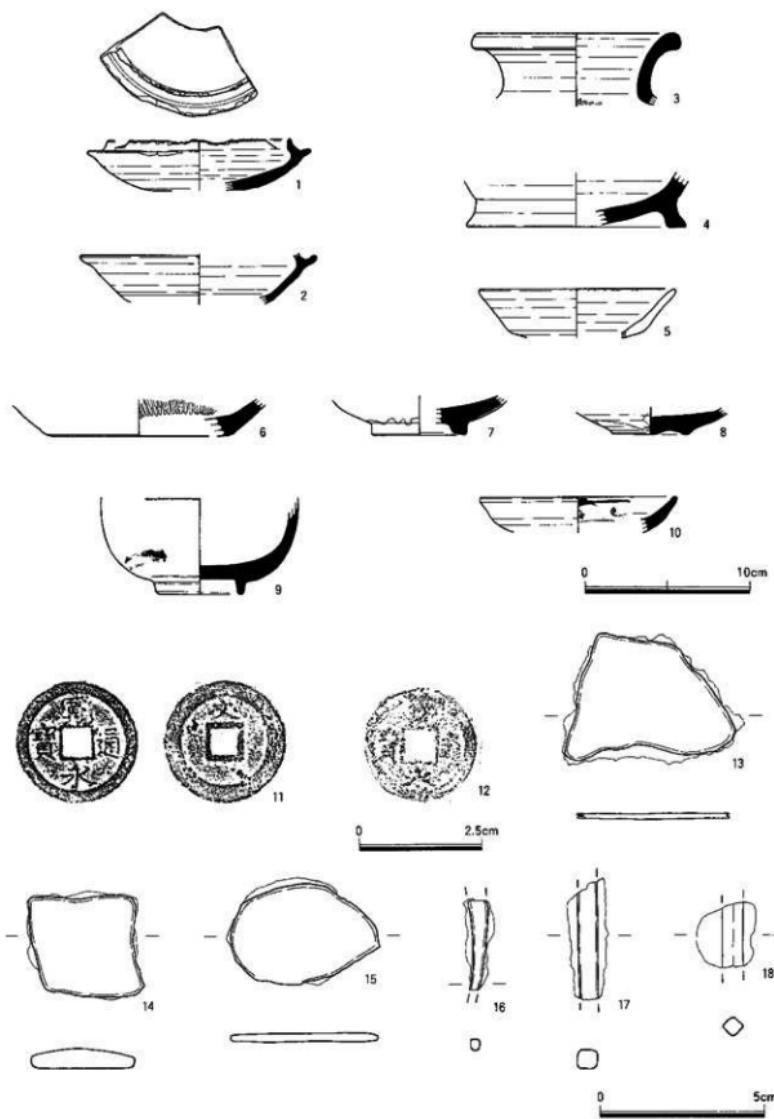


0 5cm

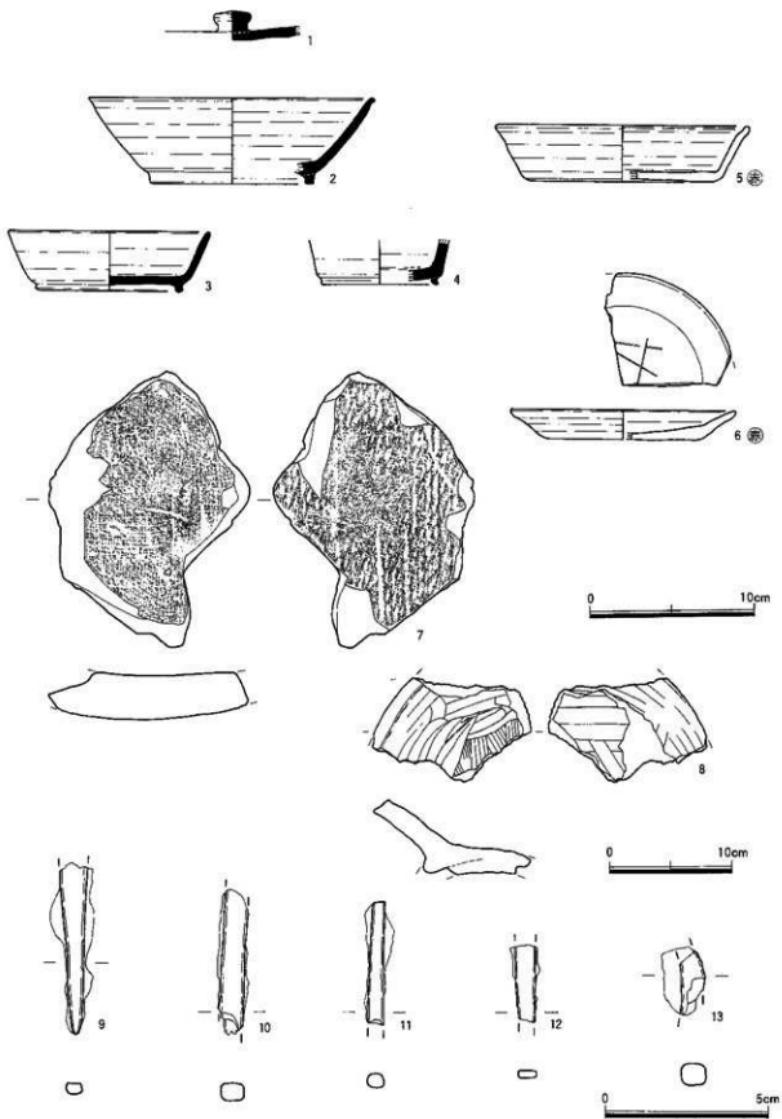
第1057図 2003年度 4-2区包含層 出土遺物（6）



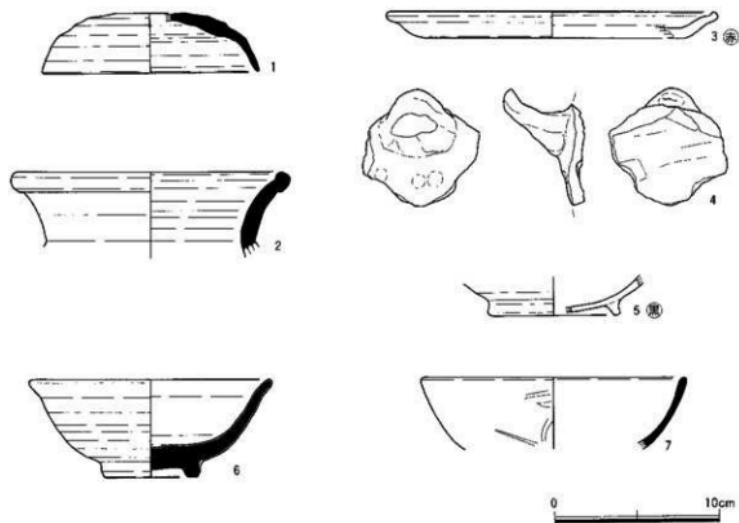
第1058図 2003年度 4-2区包含層 出土遺物 (7)



第1059図 2003年度 4-3区包含層 出土遺物



第1060図 2003年度 4-4区包含層 出土遺物



第1061図 2006年度 2区包含層 出土遺物

2001年度 5区（第1062・19063図）

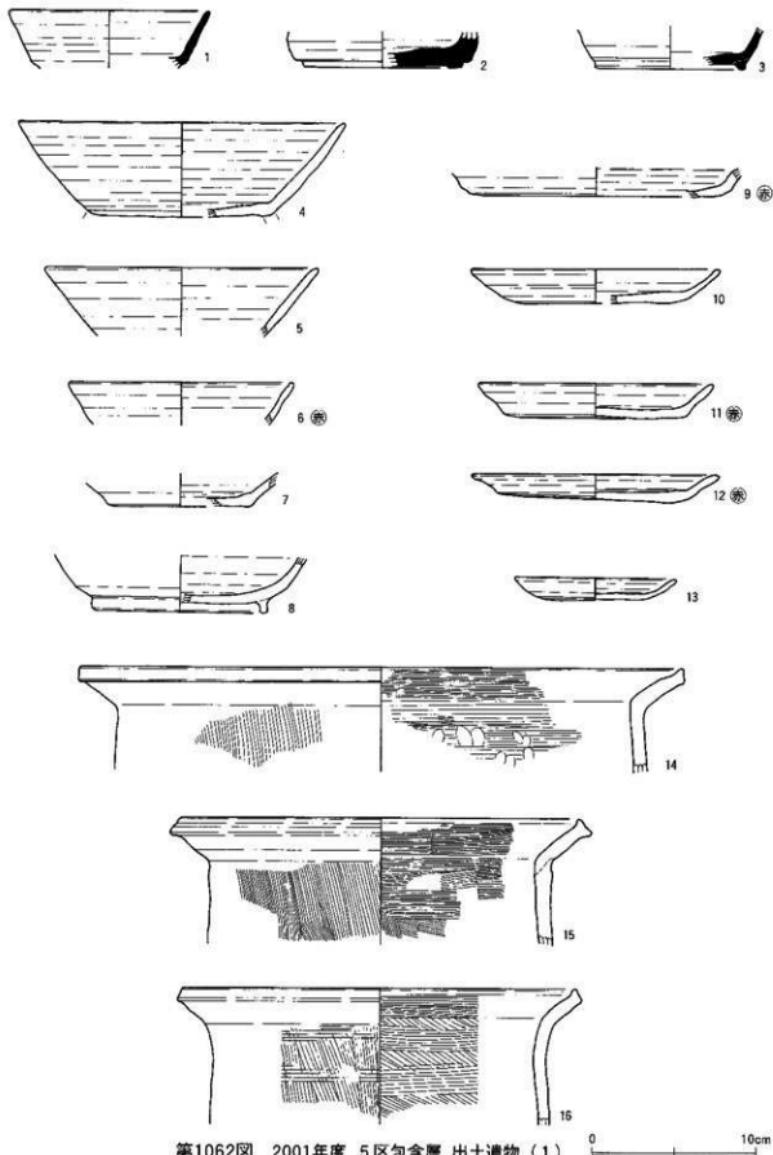
1は須恵器の付である。2・3は須恵器の壺である。4～8は土師器の付である。9～13は土師器の皿である。14～16は土師器の壺である。17・18は黒色土器の杭である。19は製塩土器である。20は備前焼の擂鉢である。

2000年度 4区（第1064図）

1は須恵器の杯である。2・3は土師器の杯である。4・5は土師器の皿である。

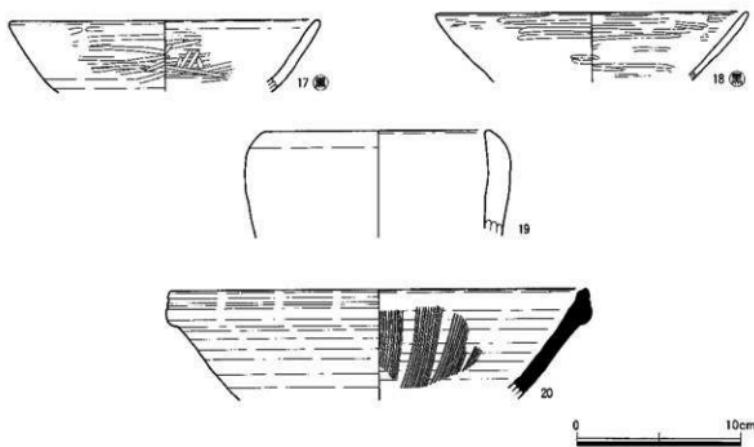
2000年度 6区（第1065図）

1～4は土師器の杯である。

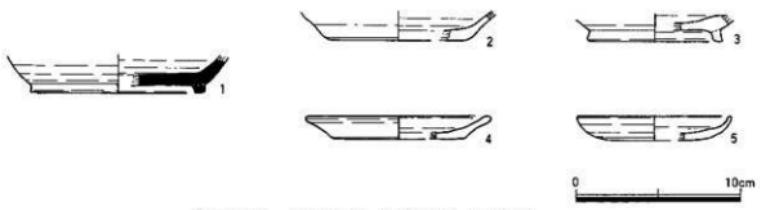


第1062図 2001年度 5区包含層 出土遺物 (1)

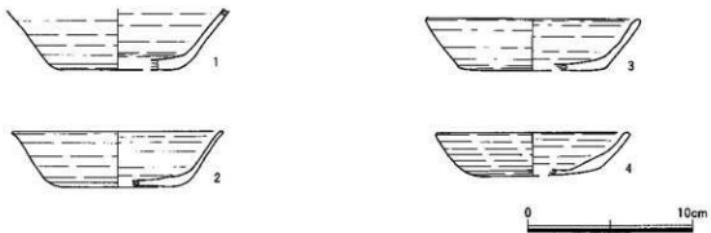
0 10cm



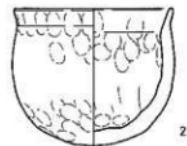
第1063図 2001年度 5区包含層 出土遺物（2）



第1064図 2000年度 4区包含層 出土遺物



第1065図 2000年度 6区包含層 出土遺物



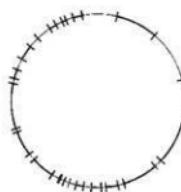
第1066図 SB3006 拡足



第1069図 SB3016 拡足



第1067図 SB3010 拡足

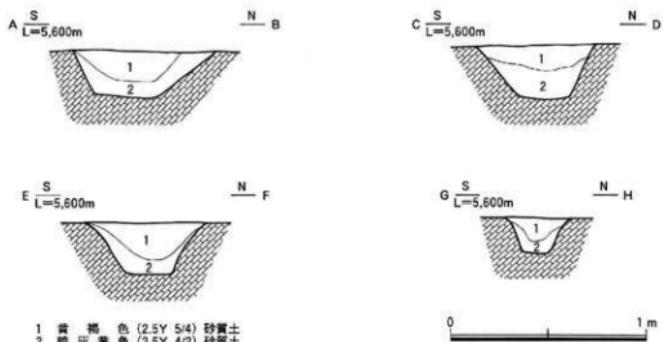


第1068図 SB3012 拡足

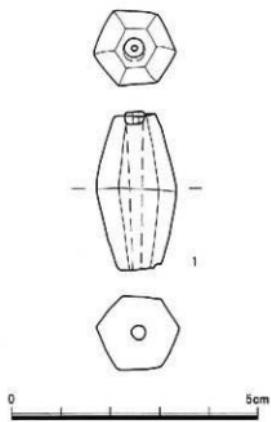


第1070図 SB3017 拡足





第1071図 SD1032 断面図



第1072図 SD1032 出土遺物



IV 自然化学分析



敷地遺跡出土須恵器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所 白 石 純

(1) 分析目的

敷地遺跡の占墳時代集落（堅穴住居・土坑）から出土している須恵器の理化学的な胎土分析を実施することにより、この時期の須恵器生産および流通を解明することを目的としている。そして、今回は以下のことについて詳細に検討した。

- (1) 遺跡内出土の須恵器が胎土分析による結果からどのように分類が可能であるか。
- (2) 須恵器の型式別（形態・技法的）で胎土に違い、あるいはまとまりがみられるか。
- (3) 須恵器生産地である大阪陶邑窯跡群や、県内の各遺跡から出土した須恵器と比較して、胎土的に差異があるかどうか。

(2) 分析試料

分析に供した試料は、表1に示した敷地遺跡出土須恵器の杯・高杯50点である。また、生産地試料としては大阪府陶邑窯跡群出土の須恵器（杯類）。徳島県内の比較試料としては古野川川中流域の大柿遺跡と下流域北岸に位置する大谷山田遺跡、東林院古墳群、カネガ谷遺跡、西山田古墳群、淨土寺山古墳群から出土した須恵器を比較試料とした。

(3) 分析結果

理化学的な分析方法は、蛍光X線分析法で実施した。この方法は、試料に含まれる成分（元素）量を測定するもので、その成分量の違いから胎土の類似差を推定する方法である。また、分析装置の特徴は、分析試料の作製が簡単で、測定も短時間のため、多量に試料を分析するのに有効である。しかし、測定試料は均質性が求められることから、分析試料を2 gほど粉末にする必要があり、一部破壊分析である。

測定装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置（セイコーインスツルメンツ社製SEA2010L）を使用し、Si・Ti・Al・Fe・Mn・Mg・Ca・Na・K・P・Rb・Sr・Zrの13元素を測定した。表1の出土・試料分析値一覧表からCa（カルシウム）とK（カリウム）の元素に顕著な違いがみられる。そこで、これらの元素のXY散布図を作成し、胎土の比較を行った。

第1図K-Ca散布図では、敷地遺跡内から出土した須恵器（杯・高杯）が、胎土的に違いがあるかどうか検討した。その結果、Ca量の差で大きく3つのグループに分類が可能である。つまり、Ca（カルシウム）量が0.35%以下と0.35%~0.7%と0.7%以上の3つに分類できそうである。また、K（カリウム）量の差でも違いがあるようである。

第2図K-Ca散布図では、敷地遺跡から出土した須恵器を型式別に分類しているが、この型式分類が蛍光X線分析による胎土分析でどのように分類されるか検討した。その結果、5世紀末から6世紀

前半の TK-23、TK-47、MT-15 は CaO 量が 0.35% 以下の少ないところに分布した。また TK-43 の 7 点はそれぞれまとまらず散漫な分布をした。そして、7 世紀初から前半の TK-209、TK-217 は、Ca 量が少ないとこから多いところまで広く散漫な分布であった。特に Ca 量が 0.35% 以下には TK-209 (試料番号 15、16、19、30)、TK-217 (試料番号 9、10、22、23、33、34、35、41、43)。0.35%~0.7% には TK-209 (試料番号 14、18、31、44、50)、TK-217 (試料番号 8、12、21、24、32、36、40)、0.7% 以上には TK-209 (試料番号 13)、TK-217 (試料番号 42) がそれぞれ分布した。また、TK-209 (試料番号 11) は K 量が他のものより多く単独で分布した。

第 3 図 K-Ca 散布図では、敷地遺跡と須恵器生産地である大阪陶邑窯跡群との比較を行った。その結果、敷地遺跡の TK-23、TK-47、MT-15、TK-43 の各型式は、陶邑窯跡群の領域とほぼ重なった。つまり、Ca 量では 0.35% 以下のものが陶邑窯跡群とほぼ胎土が一致した。

第 4 図 K-Ca 散布図では、敷地遺跡と県内の各遺跡（大柿遺跡、大谷山山遺跡、東林院古墳群、カネガ谷遺跡、西山山古墳群、浄土寺山古墳群）出土須恵器との比較を行った。その結果、各遺跡の須恵器とも Ca 量が 0.35% 以下のところに分布する傾向があった。

(4) まとめ

敷地遺跡出土須恵器の胎土分析を実施したところ、以下のことが明らかになった。

- (1) 敷地遺跡出土の須恵器は Ca 量の違いで、大きく 3 つの胎土に識別が可能であった。また、型式別（時期別）では、6 世紀後半以前の杯類はほぼ一つにまとまり、7 世紀代の須恵器は、複数の胎土に分類された。この 7 世紀代の須恵器は、複数の生産地から供給されていることが推定される。
- (2) 生産地である陶邑窯跡群との比較では、敷地遺跡の 6 世紀後半以前の杯類のはとんどが陶邑窯跡領域と重なる結果となった。
- (3) 県内の各遺跡出土須恵器との比較では、いずれの遺跡もほぼ一つにまとまる傾向にあり、遺跡ごとに胎土に違いはなかった。そして、このまとまりは、Ca 量が 0.35% 以下に分布していた。

以上のように、この分析で検討した敷地遺跡出土の 6 世紀後半以前の杯類はほぼ同じ胎土であることが推定された。そして、この分布域が陶邑窯跡群領域とほぼ重なり胎土の類似していることが推定された。現段階では Ca 量が 0.35% 以下に分布する須恵器は、陶邑窯跡群から供給されていると推定される。しかし、徳島県内で今後新たな窯跡が発見されることは想定され、今回の产地推定結果が変更されることは十分に考えられる¹¹⁾。

なお、実体顕微鏡による須恵器表面の砂粒観察を実施することができなかつた。今後の課題としている¹²⁾。

この分析の機会を与えていただいた、氏家敏之氏および徳島県埋蔵文化財センターの職員の方々にはいろいろご教示いただいた。また、陶邑窯跡群の資料提供では大阪府教育委員会にお世話になつた。末筆ではありますが、記して感謝いたします。

註)

- (1) 須恵器の所属時期は異なるが、大柿遺跡の中岡窯跡出土須恵器と消費地出土の古墳時代後期の須恵器試料を比較したことがある（白石 2004）。この分析では、中世と古墳時代の胎土は異なっていたものの、中世須

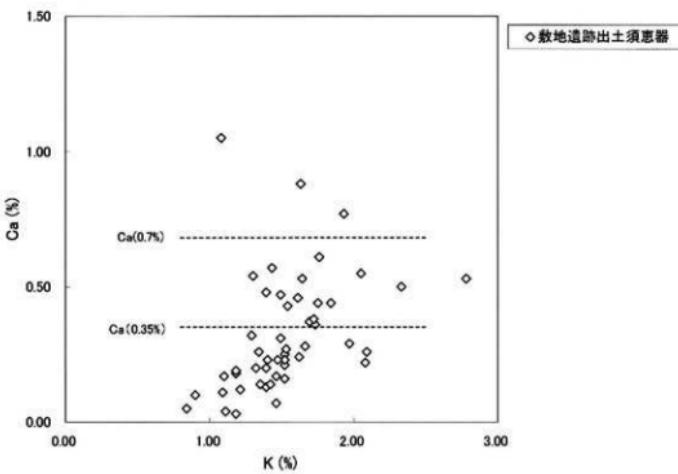
須恵器試料にCa量が多く含まれているものがあった。あくまでも胎土分析による推定であるが、徳島県内に古墳時代の須恵器窯があってもおかしくはない。

- (2) 須恵器の胎土中の砂粒観察では、高温で焼成するため、岩石・鉱物（たとえば、長石・雲母・結晶片岩など）が溶融し消失している場合が多く、観察がむずかしいのが現状である。

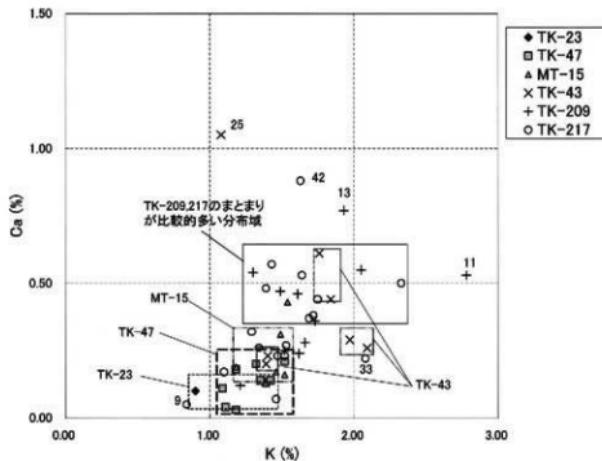
引用文献

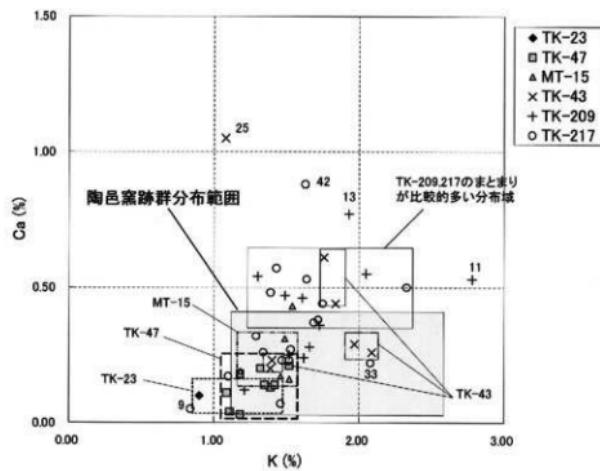
白石 純 2004 「大柿遺跡出土土器の胎土分析」「大柿遺跡Ⅱ」徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第48集

白石 純 2005 「大代古墳ほか出土埴輪・須恵器の胎土分析」「大代古墳ほか」徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第62集

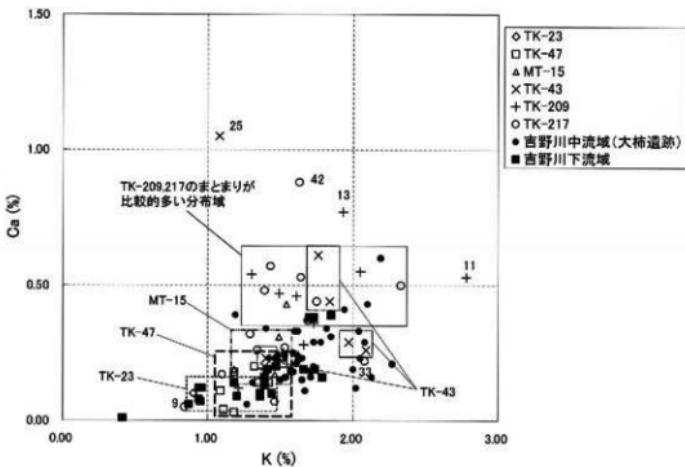


第1図 敷地遺跡出土須恵器の胎土比較（K-Ca散布図）





第3図 大阪陶邑窯跡群と敷地遺跡の胎土比較 (K-Ca 散布図)



第4図 徳島県内の各遺跡と敷地遺跡の胎土比較 (K-Ca 散布図)

表1 敷地遺跡出土須恵器試料の胎土分析一覧表

単位: Si~P(%)、Rb~Zr(ppm)

試料番号	遺構名	器種	実測番号	時期	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr	
1	SB3022	杯身	36	TK47	67.12	0.86	19.45	7.05	0.05	1.36	0.20	2.29	1.32	0.03	145	79	558	
2	SB3013	杯蓋	84	TK47	67.17	0.57	20.32	5.83	0.06	1.55	0.03	2.64	1.18	0.09	176	8	631	
3	SB3013	高杯	86	TK47	68.14	0.90	18.37	6.77	0.07	1.45	0.18	2.77	1.18	0.01	192	47	447	
4	SB3016	杯身	106	TK47	69.02	0.77	17.51	6.63	0.06	1.64	0.21	2.46	1.52	0.01	202	91	376	
5	SB3016	杯身	107	TK47	67.07	1.09	19.91	6.46	0.07	1.58	0.11	2.45	1.09	0.03	185	57	396	
6	SB3017	杯蓋	128	TK47	66.24	0.85	18.07	8.09	0.08	1.31	0.14	1.62	1.35	0.11	201	50	427	
7	SB3012	杯身	168	TK23	67.08	0.89	19.11	7.09	0.08	1.61	0.10	2.85	0.90	0.07	163	65	396	
8	SB3041	杯蓋	214	TK217	68.70	0.84	19.34	4.63	0.06	1.71	0.48	2.58	1.39	0.10	175	138	427	
9	SB3041	杯蓋	213	TK217	59.85	0.96	24.41	9.61	0.09	1.68	0.05	2.35	0.84	0.00	161	0	438	
10	SB3034	杯身	228	TK217	67.38	0.88	19.45	7.85	0.08	1.16	0.23	1.15	1.52	0.10	198	81	402	
11	SB3033	高杯	242	TK209	68.22	0.56	18.47	5.00	0.07	1.38	0.53	2.59	2.78	0.12	307	125	364	
12	SK3063	高杯	598	TK209	67.96	0.77	18.54	5.12	0.06	1.33	0.44	1.89	1.75	0.03	258	136	403	
13	SK3064	杯身	600	TK209	68.70	0.72	18.63	4.57	0.05	1.65	0.77	2.63	1.93	0.07	316	187	323	
14	SK3064	杯身	601	TK209	68.05	0.84	18.11	6.09	0.05	1.49	0.47	3.32	1.49	0.09	235	127	364	
15	SK3066	杯蓋	617	TK209	67.18	0.89	19.42	6.03	0.06	1.68	0.12	3.22	1.21	0.04	141	39	532	
16	SK3066	杯身	620	TK209	70.33	0.84	16.73	6.39	0.08	1.34	0.24	2.15	1.62	0.07	240	99	406	
17	SK3068	杯蓋	515	TK43	69.16	0.87	20.24	3.95	0.05	1.42	0.26	1.60	2.09	0.10	336	114	373	
18	SK3068	杯蓋	529	TK209	66.87	0.85	19.28	6.64	0.08	1.53	0.36	2.65	1.73	0.01	207	154	517	
19	SK3068	杯身	545	TK209	60.89	0.71	20.08	6.27	0.07	2.46	0.25	7.55	1.52	0.00	205	127	372	
20	SK3068	高杯	513	TK43	68.43	0.79	18.69	5.42	0.08	1.64	0.29	2.36	1.97	0.06	277	102	333	
21	SK3052	杯身	256	TK217	67.45	0.61	20.84	4.36	0.05	1.53	0.50	2.16	2.33	0.10	313	135	335	
22	SB3051	杯蓋	268	TK217	69.67	0.96	18.34	4.74	0.05	1.59	0.26	2.79	1.34	0.11	248	83	383	
23	SB3051	杯身	271	TK217	63.27	0.80	19.60	5.45	0.06	2.47	0.27	6.27	1.53	0.05	246	98	339	
24	SB3050	杯身	55	TK217	66.52	0.80	19.06	4.44	0.04	2.28	0.37	4.79	1.69	0.06	283	102	337	
25	SB3047	杯蓋	74	TK43	68.98	0.96	19.70	11.17	0.13	1.62	1.09	3.04	1.08	0.03	200	214	496	
26	SB3047	杯身	76	TK43	71.15	0.74	17.91	4.79	0.04	1.23	0.44	1.63	1.84	0.08	282	140	389	
27	SB3047	杯身	247	TK43	68.99	0.83	19.31	4.97	0.05	1.77	0.20	2.21	1.39	0.13	215	85	413	
28	SB3046	杯蓋	98	TK43	70.55	0.66	17.34	4.78	0.05	1.43	0.61	2.51	1.76	0.07	251	138	370	
29	SB3046	杯身	98	TK43	68.86	0.84	18.54	5.75	0.07	1.47	0.23	2.54	1.40	0.13	245	80	431	
30	SB3044	杯蓋	189	TK209	67.91	0.79	18.28	6.17	0.05	1.71	0.28	2.84	1.66	0.10	217	97	400	
31	SB3044	杯身	158	TK209	67.71	0.64	17.78	6.44	0.06	1.57	0.54	3.72	1.30	0.06	208	122	371	
32	SB3043	高杯	15	TK217	68.98	0.82	18.05	6.41	0.06	1.48	0.57	2.12	1.43	0.08	230	162	357	
33	SB3039	高杯	31	TK217	68.45	0.80	17.47	7.12	0.01	1.57	0.22	1.89	2.08	0.07	282	91	365	
34	SB3040	杯身	2	TK217	67.57	0.80	19.56	5.98	0.07	1.44	0.07	2.61	1.45	0.00	168	47	582	
35	SB3031	杯身	38	TK217	66.84	0.88	19.76	7.47	0.08	1.43	0.17	1.99	1.10	0.07	176	63	531	
36	SB3030	杯蓋	42	TK217	66.27	0.81	18.90	6.84	0.08	1.67	0.38	3.00	1.72	0.02	226	148	437	
37	SB3028	杯身	221	TK47	68.07	0.97	19.33	6.31	0.05	1.28	0.13	2.16	1.39	0.11	186	90	475	
38	SB3026	杯身	222	TK47	67.78	0.87	19.53	6.07	0.04	1.38	0.14	2.43	1.42	0.11	186	78	448	
39	土壤混合物	6	杯身	231	TK47	64.60	1.01	22.04	6.27	0.07	1.60	0.04	2.88	1.11	0.05	193	43	523
40	SB3057	杯身	281	TK217	71.66	0.68	17.13	3.79	0.03	1.61	0.53	2.63	1.64	0.05	254	145	401	
41	SB3057	杯身	284	TK217	65.47	0.92	20.56	6.63	0.07	1.57	0.23	2.68	1.47	0.07	175	80	463	
42	SB3057	杯身	295	TK217	68.92	0.68	18.26	5.32	0.07	1.39	0.88	2.45	1.83	0.10	287	225	379	
43	SB3057	杯身	278	TK217	67.75	0.86	19.45	6.59	0.05	1.35	0.32	1.96	1.29	0.11	173	135	553	
44	SB3068	杯蓋	307	TK209	68.15	0.80	20.02	4.81	0.06	1.49	0.46	1.89	1.61	0.51	191	107	356	
45	SB3066	杯蓋	314	MT15	66.14	0.96	19.99	6.63	0.05	1.42	0.31	2.75	1.49	0.13	289	95	386	
46	SB3066	杯身	312	MT15	68.04	0.97	19.12	6.24	0.09	1.52	0.43	1.79	1.54	0.10	281	126	395	
47	SB3065	杯蓋	321	MT15	70.39	0.84	16.97	7.00	0.06	1.35	0.17	1.39	1.45	0.14	210	87	436	
48	SB3081	杯蓋	344	MT15	69.87	0.86	17.49	6.04	0.07	1.48	0.19	2.53	1.18	0.11	190	96	534	
49	SB3081	杯身	347	MT15	68.06	0.83	19.19	5.12	0.06	1.67	0.16	3.08	1.52	0.11	257	86	365	
50	SB3070	高杯	353	TK209	67.04	1.27	19.47	5.27	0.06	1.59	0.55	2.37	2.05	0.12	211	74	429	

敷地遺跡出土玉類の材質調査

(1) はじめに

敷地遺跡の出土品を精査中、無色透明の切子玉の穿孔の一方に黄色の小玉が挿まっていることが確認された。徳島県立埋蔵文化財総合センターでこれらの玉類の材質調査を実施したので報告する。

(2) 調査資料の概要

遺物番号 第1072図1

出土遺構 SD1032

- (1) 無色透明の切子玉
- (2) 黄色不透明の小玉

(3) 調査方法

材質調査は、蛍光X線分析法による定性分析によって実施した。

分析条件

- (1) 分析装置 エネルギー分散型蛍光X線分析計 SEA2010L（セイコーインスツルメンツ株式会社製、徳島県立埋蔵文化財総合センター設置）
- (2) 電圧 15kV（エネルギー5keV以下のスペクトル…主にNa～Caの軽元素分析用）
50kV（エネルギー38.45keVまでのスペクトル）
- (3) 照射径 10mm
- (4) 電流 255mA（15kV時）、63mA（50kV時）
- (5) 測定時間 800秒（50kV、15kVで各400秒）
- (6) 測定室 真空（減圧状態）
- (7) その他 小玉は切子玉から取り外し1、穿孔にフロロカーボン（フッ素系樹脂）製の釣り糸を通して測定位置に固定した。釣り糸から検出されるスペクトルは微弱でガラス製品の測定にはほとんど影響がない。
切子玉は、そのまま装置で測定位置に設置した。

(4) 調査結果

(1) ガラス製小玉（第1図）

定性分析の結果、Na、Mg、Al、Si、K、Ca、Fe、Mn、Ti、Pb、Sn、Ba、Sr、Zrを検出した。特にNa、Al、Caのか、Pb、Sn、Feが特徴的なピークとして検出された。

徳島県立埋蔵文化財総合センターの調査例としては、鳴門市の萩原7号石室墓、8号石室墓、東みよし町の大柿遺跡の古墳時代後期集落出土品で確認している。これらの調査事例では、Na、Al、Caが検

出され、Pb のピークが非常に強く、着色因子としては Fe が推定できるようスペクトルが検出されるこ
という共通した特徴があり、今回も同様の特徴を示すスペクトルが得られた。

(2) 切子玉（第2図）

定性分析の結果、Si、K、Fe、Cu を検出した。Si が特徴的なピークを示す。

(5) 考 察

黄色のガラス製小玉は、徳島県立埋蔵文化財総合センターの調査例としては、鳴門市の萩原7号石室墓、8号石室墓、東みよし町の大柿遺跡の古墳時代後期集落出土品で確認している。これらの調査事例では、Na、Al、Ca が検出され、Pb のピークが非常に強く、着色因子としては Fe が推定できるようスペクトルが検出されるこという共通した特徴があり、今回も同様の特徴を示すスペクトルが得られた。古墳時代後期に見られる黄色のガラス製小玉の出土例として認識することができる。

切子玉については、無色透明という姿からも、二酸化ケイ素の結晶と考えて差し障りないだろう。

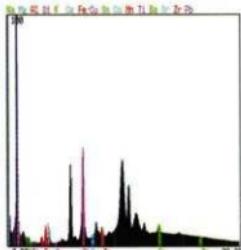
（植地岳彦）



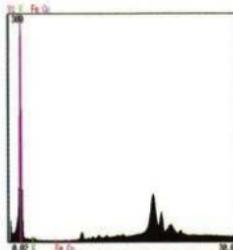
写真1 調査資料

注

1 初回、切子玉に小玉がはまり込むような状態であって、容易に分離させることができないと考えられていた。そのため予備調査の段階では、小玉の材質調査時に切子玉の組成が反映してしまい、既知のものとは異なるデータが取得され、評価が難しかった。しかし本調査の段階になって、両者は意外と簡単に分離し、切子玉と小玉は個別に材質調査可能となった。これによって小玉については既知の資料と酷似するスペクトルデータを得た。



第1図 ガラス製小玉のスペクトル



第2図 切子玉のスペクトル

V ま と め



1 弥生時代終末～古墳時代初頭

敷地遺跡において最も古い時期の遺構が確認されたのは南寄りに位置した1999年度2-1区、1998年度6区などの調査区である。SK3003、SK3013などから出土した十器が該当する。遺構はいずれも浅い皿状に掘りこまれた隅丸方形土坑で、高杯、広口壺、甕などが出土している。周辺部からは住居などの遺構が伴わざるば単独で点在しているため遺構の性格は不明である。

2 古墳時代

(1) 敷地遺跡出土の須恵器とその年代について

敷地遺跡の古墳時代集落は70軒の堅穴住居を中心とし、その他に掘立柱建物、土坑、小穴、溝などの遺構から構成されている。その内で遺物がまとまって出土しているのは堅穴住居と土坑であり、特に須恵器をもとにして遺構の年代を行っていった。今回の年代の決定にあたって利用したのは東三好町大柿遺跡の調査によって示されたものを主に参考に行っている（藤川2004）。敷地遺跡の特徴としては堅穴住居同士の切り合い関係が少ない事や須恵器の器種組成が単純なことなどから、後述するTK209、TK217などの段階では細分が困難となっている。主な古墳時代の遺構の時期は表1に示しておく。また時期の区分においては杯蓋・杯身の法量や形態を目安として用いている（グラフ1・2）。

(a) TK23併行期（第1図）

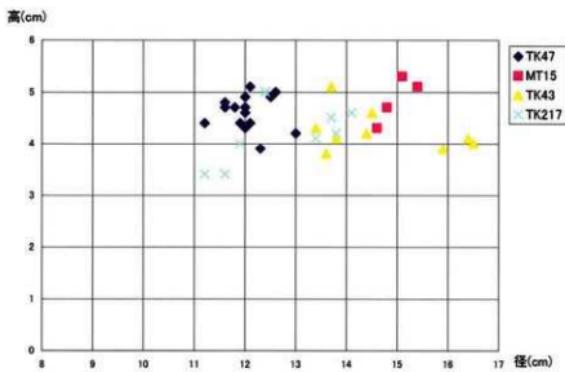
SB3012、SB3021などの遺構から出土した土器が該当すると考えられる。杯身、杯蓋、無蓋高杯などが出土している。杯身・蓋ともに口径は11~12cmと小型であり、器高も1~5cmでまとまっている。蓋の肩部の稜線は明確な段を持っていている。高杯は無蓋短脚で透かし穴は4単位である。

(b) TK47併行期（第2・3図）

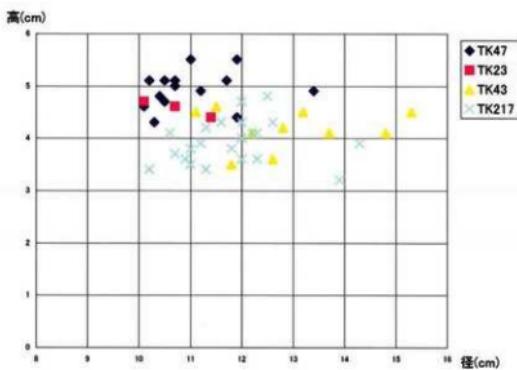
SB3003、SB3013、SB3016、SB3017、SK3016などの遺構から出土した土器が該当すると考えられる。杯身、杯蓋、無蓋高杯、有蓋高杯、壺、甕などが出土している。杯身・蓋ともに口径は11~12cmとTK23段階とはほぼ変わらないが、器高は5cmに近くやや高めである。蓋の肩部の稜線は凹綫状に退化を始めている。高杯は無蓋、有蓋ともに短脚で透かし穴の単位は3単位が上体となっている。壺、無蓋高杯には櫛描波状文が口縁部下に施されている。

(c) MT15併行期（第4図）

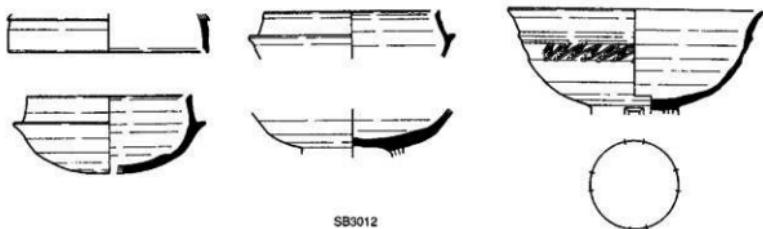
SB3061、SB3063、SB3066などの遺構から出土した土器が該当すると考えられる。杯身、杯蓋、高杯、甕などが出土している。杯蓋の口径は14~16cmと大型化しており、グラフには数値化されていないが杯身についても同様の傾向を示している。器高も4~6cmと高くなる。高杯は無蓋・有蓋の両者が存在するとみられる。また新たに長脚の高杯が出現している。



グラフ 1　杯蓋の法量



グラフ 2　杯身の法量



第1図 TK23併行期

(d) TK43併行期 (第5~8図)

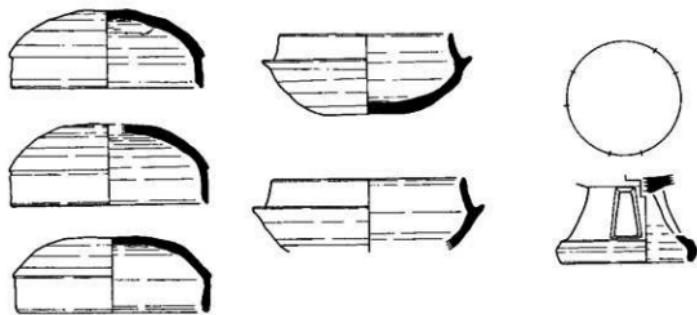
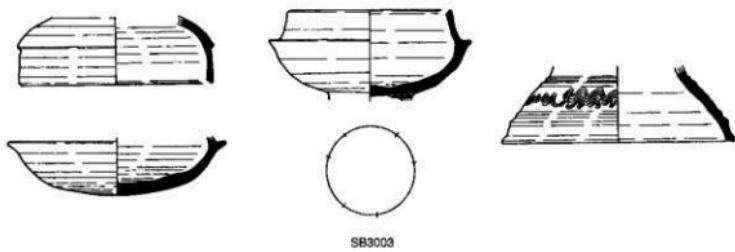
SB3046、SB3047、SB3048、SK3068、SK3082などの遺構から出土した土器が該当すると考えられる。杯身・杯蓋・高杯・壺・甕・提瓶・甌などが出土しており、やや器種が増加するようである。杯身・蓋の口径は13~17cmとばらつきが大きくなる。器高は4~5cmであり、前段階に比べるとやや低くなるようである。高杯は無蓋・有蓋の両者が存在するとみられる。長脚で透かし穴を2段に持つ高杯が多くみられるようになる。壺は台付と丸底のものが存在する。

(e) TK209・TK217併行期 (第9~10図)

SB3030、SB3034、SB3057、SK3066、SK3067などの以降から出土した土器が該当すると考えられる。杯身・杯蓋・高杯・椀・甕などが出土している。杯身・蓋の口径はTK43と同様にばらつきが大きいが、径は10~14cmとやや小型化している。器高も3~4cmと前段階に比べると低くなり、扁平化する傾向が窺われる。杯の底部や蓋の天頂部における回転ヘラ削りの範囲は、前段階に比べると後退して範囲が狭くなる。高杯は無蓋・有蓋の両者が存在しているが、脚部は短脚のものに限定され、透かし穴もほとんどみられなくなる。椀は台付のものも存在している。

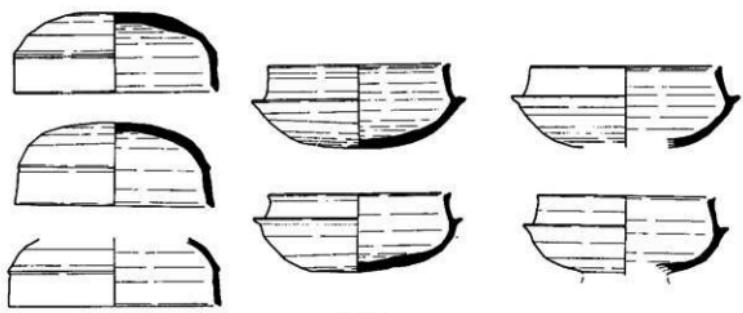
(2) 集落の変遷 (第11~15図)

敷地遺跡に集落が出現するのは5世紀末のTK23段階併行期である。堅穴住居群のほぼ中央部に点在している。その後のTK47段階併行期にはいると住居の数は大幅に増加して、南北部分を中心に集落が展開していく。6世紀代になると集落は北寄りに中心が移っていく。MT15、TK43の各段階においては住居の数も前段階に比べると減少傾向がみられる。7世紀代になると住居の数は再び増加傾向に転じる。特にTK217段階になると集落は北寄りから再び中央部へと抜がりをみせるとともに、北端には掘

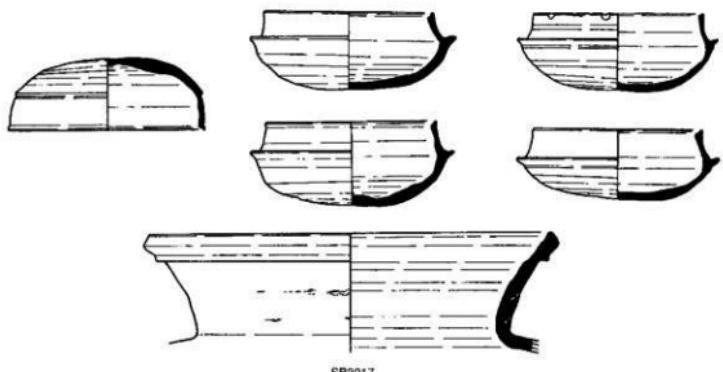


SB3013

第2図 TK47併行期(1)



SB3016



SB3017



SB3016

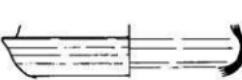
第3図 TK47併行期(2)



SB3061

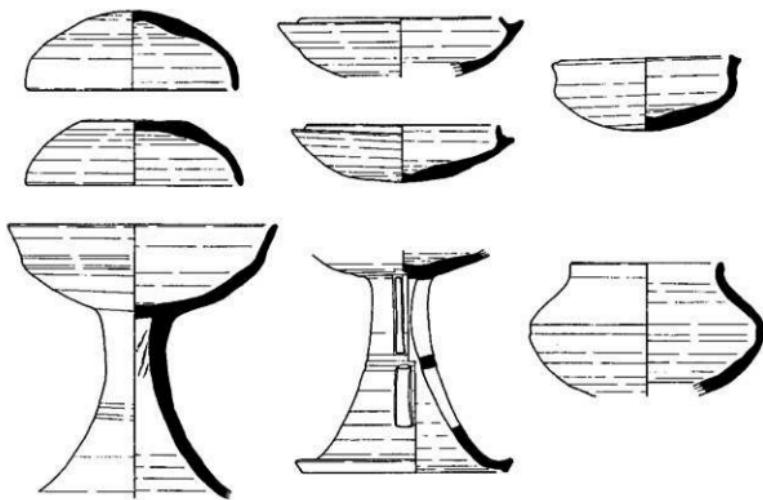


SB3063

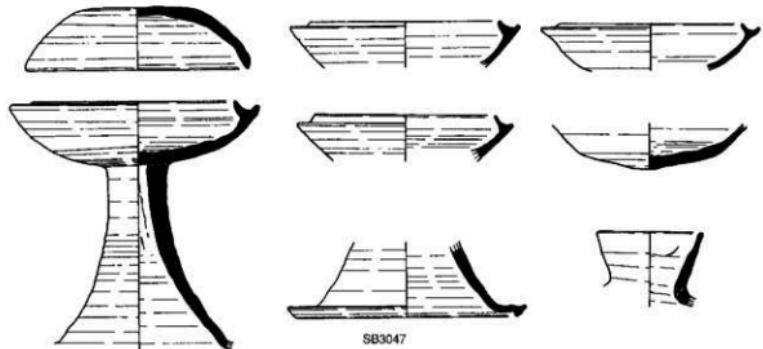


SB3066

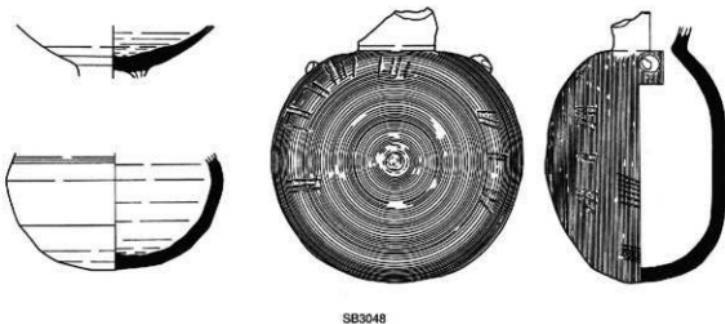
第4図 MT15併行期



SB3046



第5図 TK43併行期(1)



第6図 TK43併行期(2)

立柱建物を中心とした一角が形成される。

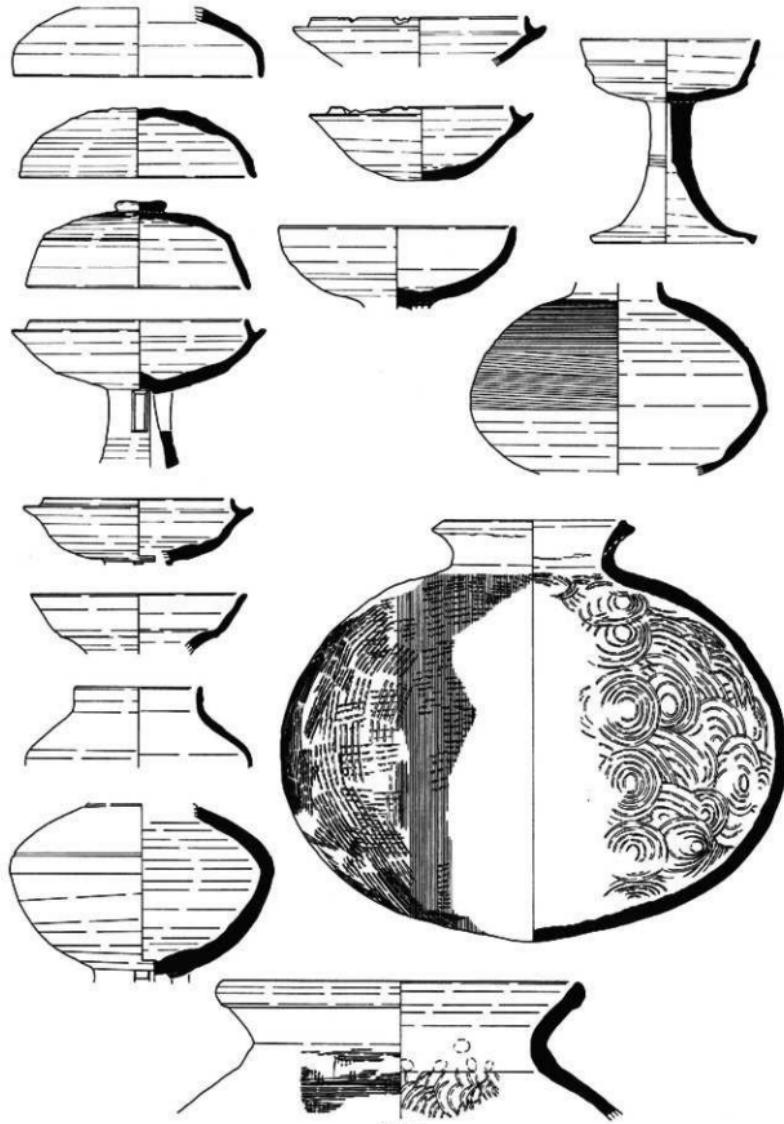
(3) 積穴住居の形態 (グラフ3~5)

積穴住居の平面形状は方形あるいは長方形をしている。床面積は15~50m²に分布を見せているが、中心となるのは15~25m²のやや小型のものであり、数値の測定可能であったものの中で約5割に達している。35m²を超えるやや大型のものは積穴住居の総数70軒の内7軒と1割程度になる。時期のわかるものを取り上げると、TK47併行期に2軒(SB3003、SB3007)、MT15併行期に1軒(SB3063)、TK43併行期に1軒(SB3048)、TK217併行期に2軒(SB3019、SB3065)が存在しており、各時期に1~2軒程度、大型の住居が存在していたことがわかる。しかし出土する遺物などでは中、小の積穴住居と明確な違いが見いだせない為、大型住居の正確については不明である。

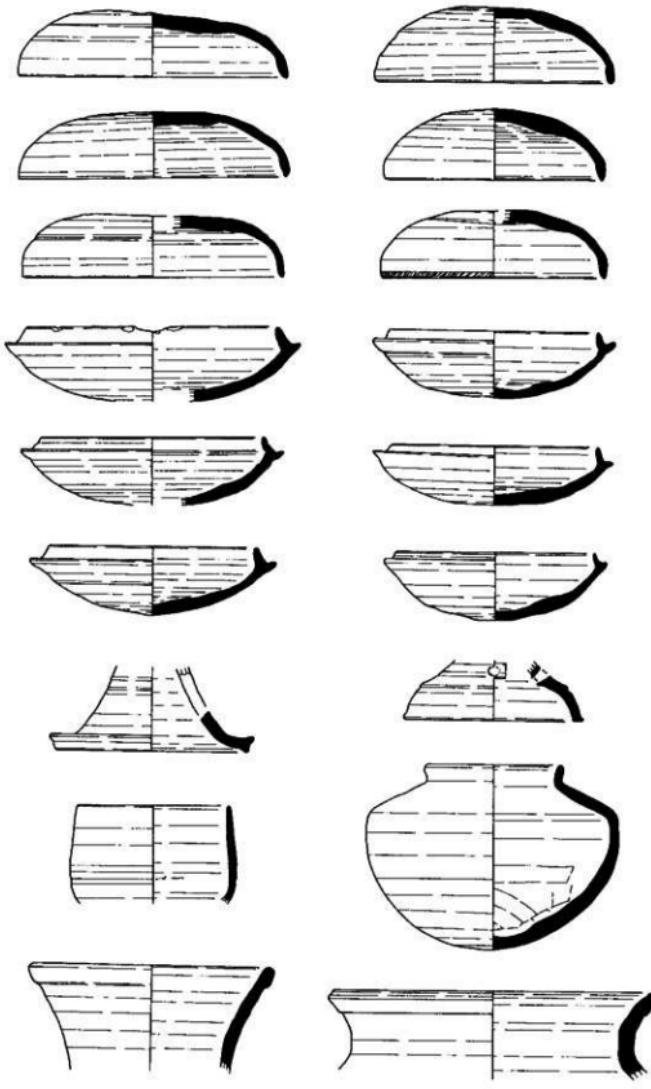
積穴住居には竈の一角に作り付けの竈を持つものが一般的である。ただし竈の形態は時期によって2種類の形態が存在しており、TK47併行期段階以前のものは煙道部が短く、竈の袖材や支脚に石が一部使用される傾向が認められる。また竈の主軸の方位についても東向きのものが多くみられるのが特徴である。一方、TK43併行期段階以後のものは煙道部が長いもので占められている。竈の支脚には高杯や椀、杯蓋を倒置して使用しているものが多く認められ、石を使用するものは少数である。また竈の主軸の方位は北向きのものが多くみられるのが特徴である。住居内における竈の位置は、竈を正面奥に見立てた場合に壁の中央か右寄りに位置するものでほぼ占められており、同時期の大柿遺跡における竈の配置状況とも共通している(田川2006)。

(4) 掘立柱建物の形態 (グラフ6・7)

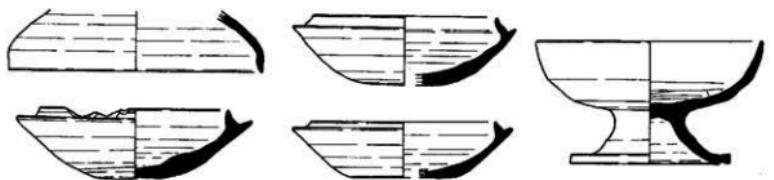
古墳時代に所属するとみられる掘立柱建物はSA3034~SA3040の7軒が確実と考えられる。周囲の廃棄土坑より出土した遺物の年代から時期的にはSA3040がTK43併行期と考えられる他は主にTK217併行期に属すると考えられる。倉庫の可能性が考えられる総柱のものはSA3034、SA3038の2棟であり、それ以外は側柱の平地式の建物である可能性が高い。床面積を積穴住居と比較した場合、大きさについ



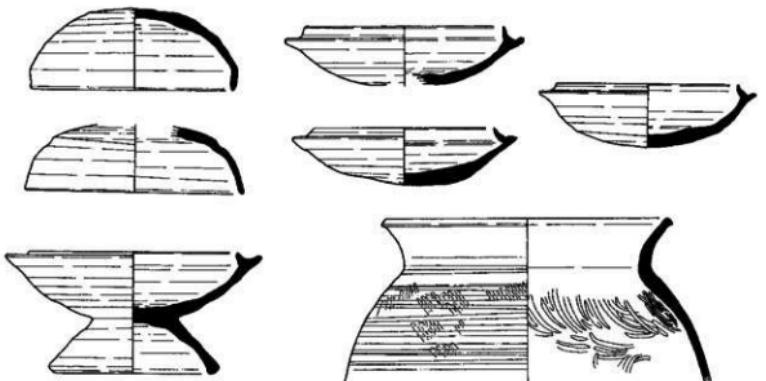
第7図 TK43併行期(3)



第8図 TK43併行期(4)

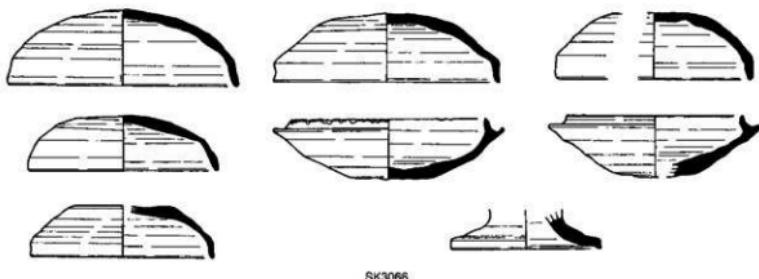


SB3034

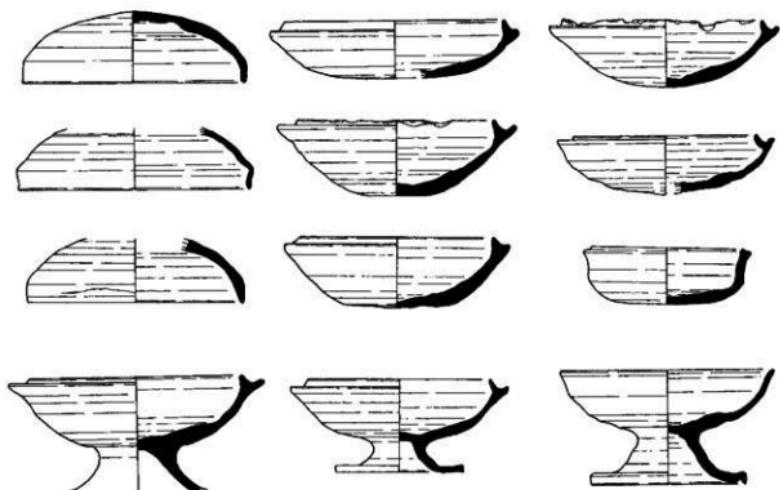


SB3057

第9図 TK209・217併行期(1)



SK3066

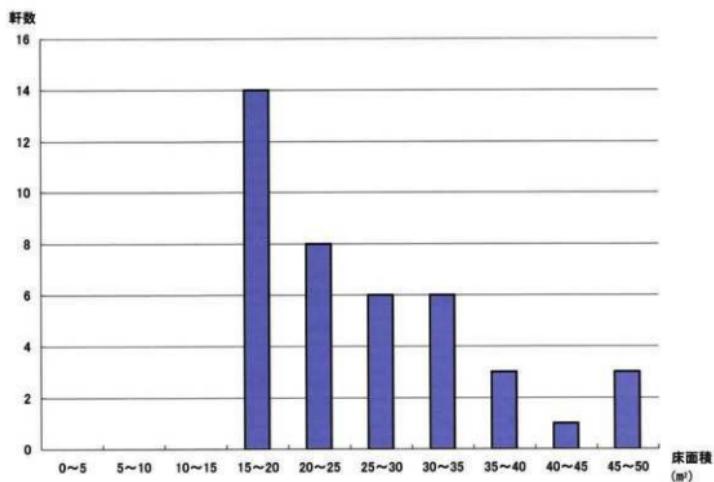


SK3067

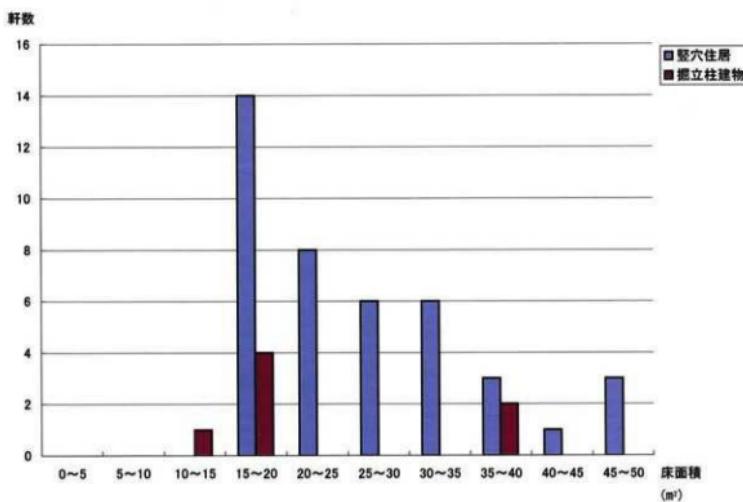
第10図 TK209・217併行期(2)

番号	骨型	時期	副葬器・器種	備考	床面遺物	壁面遺物
SB	3001	TK47	杯蓋		○	×
	3002	不明	骨		○	×
	3003	TK47	杯蓋・杯身・両耳・器台		○	×
	3004	TK47	杯蓋・杯身	製造上記	○	×
	3005	不明	骨		○	×
	3006	TK47	杯蓋・高杯・蓋	輪塗土器	○	×
	3007	TK47	杯蓋	古代土器御より有り	?	×
	3008	TK217	高杯	古い時代が混じる	○	×
	3009	TK47	杯蓋		○	×
	3010	TK217	杯蓋・杯身・蓋		○	×
	3011	TK47	杯蓋・蓋	SB312に切られでいる為時期検討	○	×
	3012	TK23	杯蓋・杯身・両耳	製造上記	○	×
	3013	TK47	杯蓋・杯身・高杯・蓋	製造上記	○	×
	3014	TK47?	杯蓋・杯身		○	×
	3015	不明	骨身		○	×
	3016	TK47	杯蓋・杯身・高杯		○	×
	3017	TK47	杯蓋・杯身・蓋	製造上記	○	×
	3018	TK217	杯蓋		○	×
	3019	TK217	杯蓋		○	×
	3020				○	×
	3021	TK23	杯蓋・杯身		○	×
	3022	TK47	杯蓋・杯身・高杯・蓋	輪塗土器	○	×
	3023	不明			○	×
	3024	TK217	杯身	輪塗土器	○	×
	3025	不明			○	×
	3026	TK47	杯身		○	×
	3027		杯身		○	×
	3028		骨身・高杯	古い時代が混じる	?	×
	3029	不明	骨身		?	×
	3030	TK217	杯蓋・杯身・高杯	羽口	○	×
	3031	TK217	杯蓋・杯身		○	×
	3032	不明			○	×
	3033	TK209~217	杯蓋・杯身		○	×
	3034	TK217	杯蓋・杯身・両耳	羽口	○	×
	3035	TK209~217	杯蓋・杯身・両耳	要場上記	○	×
	3036	不明			○	×
	3037	不明			○	×
	3038	TK217	杯身		○	×
	3039	TK217	杯身・高杯		○	×
	3040	TK217	杯身・両耳		○	×
	3041	TK217	杯蓋・杯身・高杯・台付鏡	石製劫鉢車	○	×
	3042	TK217	高杯		○	×
	3043	TK217	内杯・蓋		○	×
	3044	TK209~217	杯蓋・杯身・高杯・蓋	台製劫鉢車	○	×
	3045	TK217	杯身・蓋	羽口	○	×
	3046	TK43	杯蓋・高杯・台付鏡・蓋		○	×
	3047	TK43	杯蓋・杯身・高杯・袋瓶		○	×
	3048	TK43	高杯・蓋・提瓶		○	×
	3049	TK217	高杯		○	×
	3050	TK217	杯身		○	×
	3051	TK217	杯身・杯蓋・高杯・蓋	羽口	○	×
	3052		杯身		○	×
	3053		杯身		○	×
	3054	不明			○	×
	3055	TK47?	高杯		○	×
	3056	TK209~217	杯蓋・杯身・高杯・蓋	SB3061を切っている	○	×
	3057	TK217	杯蓋・杯身・高杯・蓋	SB3062に切られている	○	×
	3058		杯身		○	×
	3059		蓋		○	×
	3060		蓋		○	×
	3061	MT15	杯蓋・杯身		○	×
	3062	不明		SB3061を切っている	○	×
	3063	MT15	杯身・杯蓋	SB3062に切られている	○	×
	3064	TK217?	杯蓋・杯身	SB3063に切っている・MT5の遺物は侵入?	○	×
	3065	TK217?	杯蓋・杯身・高杯・蓋	MT15の異物が侵入?	○	×
	3066	MT15	杯蓋・杯身・蓋		○	×
	3067	不明			○	×
	3068	TK209~217	杯身		○	×
	3069		杯身		○	×
	3070	TK209~217	高杯		○	×
SK	3016	TK47	杯身・高杯・蓋		○	×
	3017		蓋		○	×
	3028	TK47?	杯身・杯蓋・高杯・袋	ト向に古代などの呉物が混入	○	○
	3058	TK217	杯身・高杯		○	○
	3061	TK217	杯身		○	○
	3062	TK217	杯身		○	○
	3063	TK217	高杯・蓋		○	○
	3064	TK217	杯身・高杯		○	○
	3066	TK217	杯身・高杯		○	○
	3067	TK217	杯身・高杯		○	○
	3068	TK43	杯身・杯身・高杯・ハンク・台付鏡・蓋・蓋		○	○
	3069	TK43	杯身・杯身・高杯・台付鏡・蓋・蓋		○	○

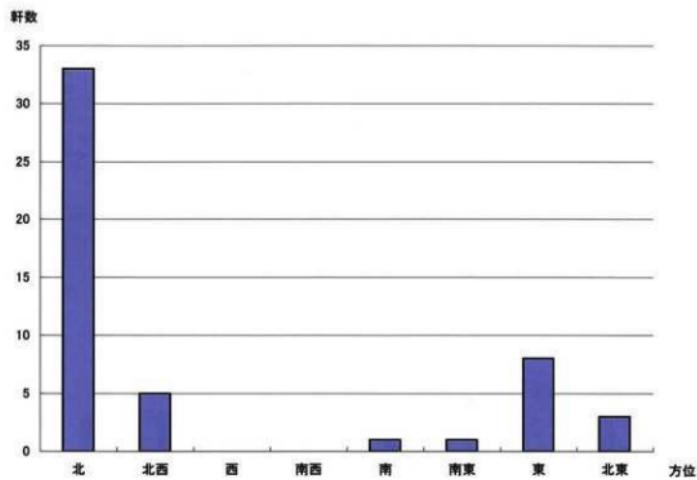
表1 古墳時代の主な遺構の時期



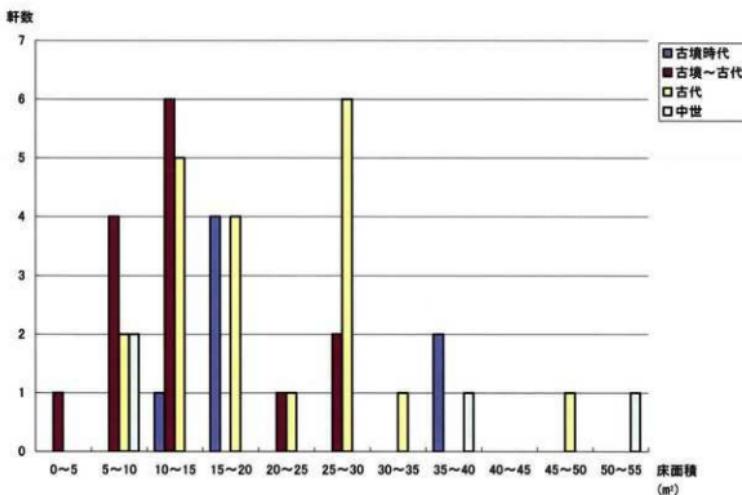
グラフ 3 竪穴住居の床面積



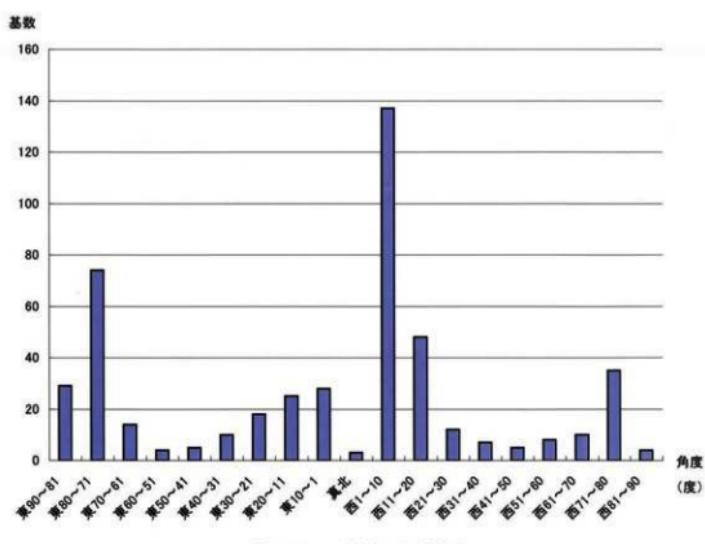
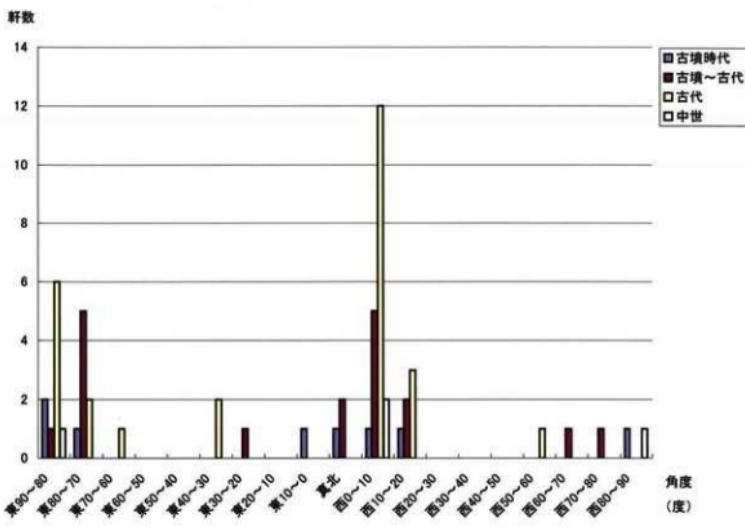
グラフ 4 古墳時代建物の床面積

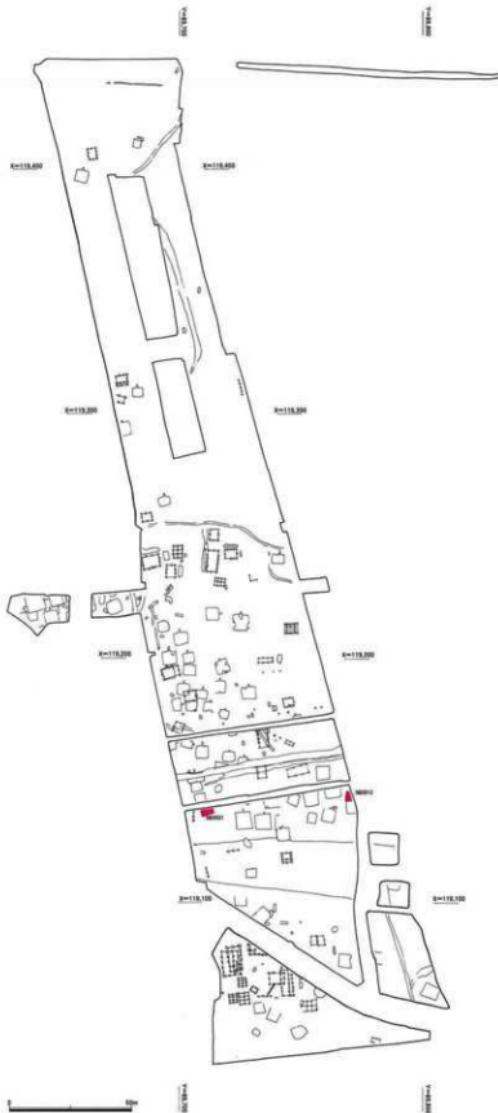


グラフ 5 電の方位

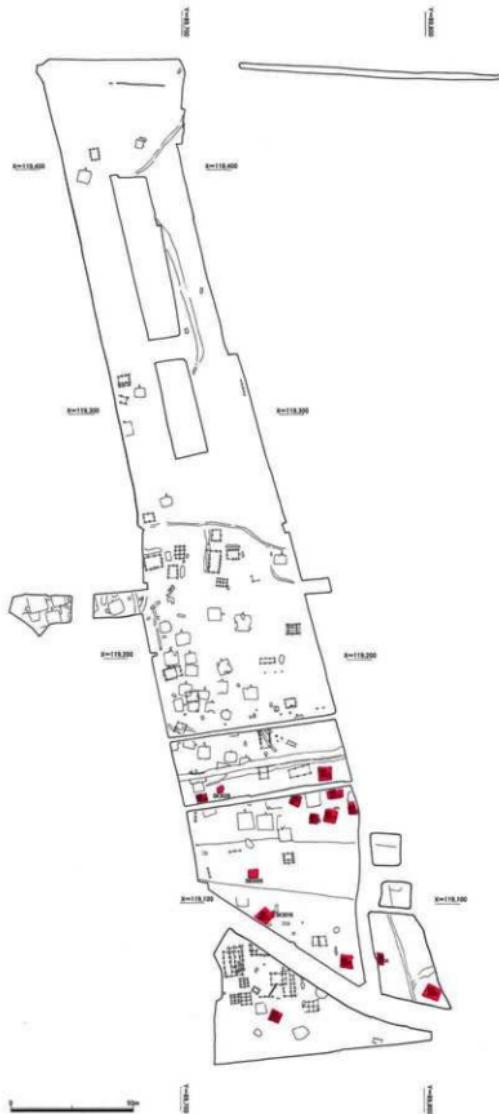


グラフ 6 据立柱建物の床面積

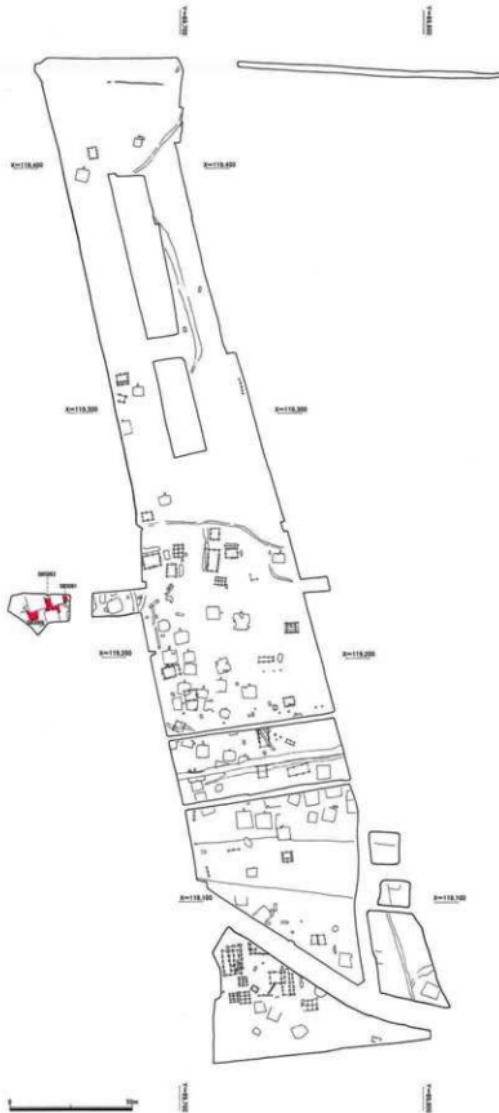




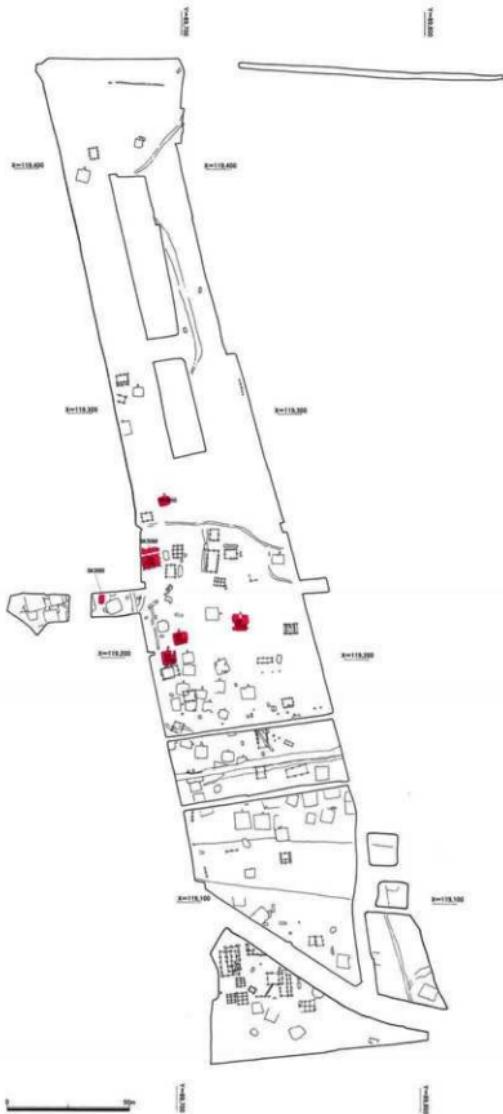
第11図 TK23段階併行期



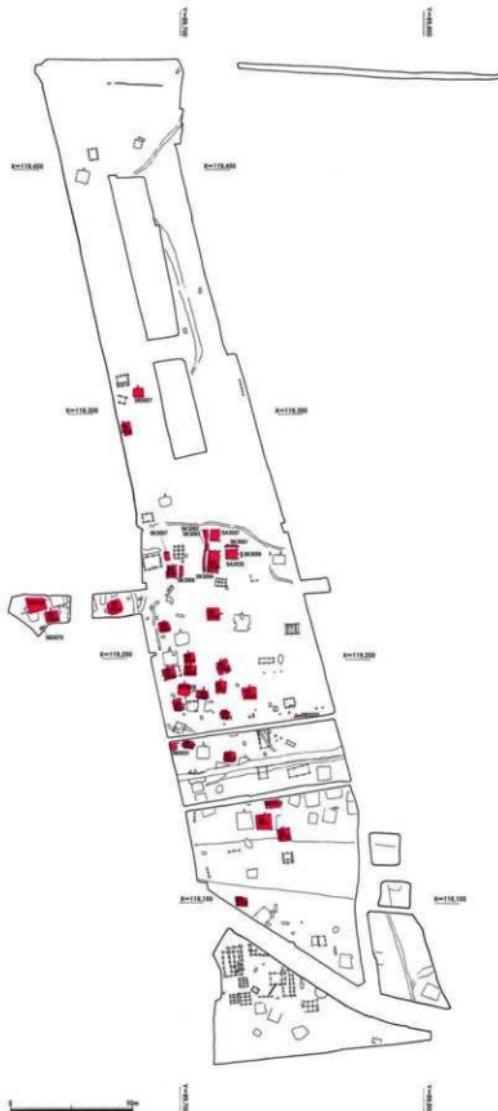
第12図 TK47段階併行期



第13図 MT15段階併行期



第14図 TK43段階併行期



第15図 TK209・217段階併行期

てはそれほど差がみられないため、特別な建物と考えることはできない。また立地をみてても堅穴住居に比べるとより低地部に作られている。土坑から出土する遺物に土鍤や紡錘車、鉄器などの工具や道具類が多くみられることからみて、居住用の施設と考えるよりはむしろ作業用の施設であった可能性を考えられる。

3 古代

(1) 主な遺構の時期と変遷

敷地遺跡では大きく3面の遺構面の存在が確認されたが、3面の遺構面が明確に分離されるのは北半部の1998年度8区や2003年度3-1区よりも北側の調査区に限られてくる。それより南側では1999年度3区において3面が確認できる他は基本的に2面となっている。そのため第1面→古代～中世、第2面→古代、第3面→古墳～古代というような時期幅が人柱において存在している。遺構面毎では細かな時期の細分が不可能であるため、各遺構から出土した比較的一括性の高い遺物をもとに大きく3時期の遺構を取り上げておく。

(a) 8世紀代の遺構（第16図）

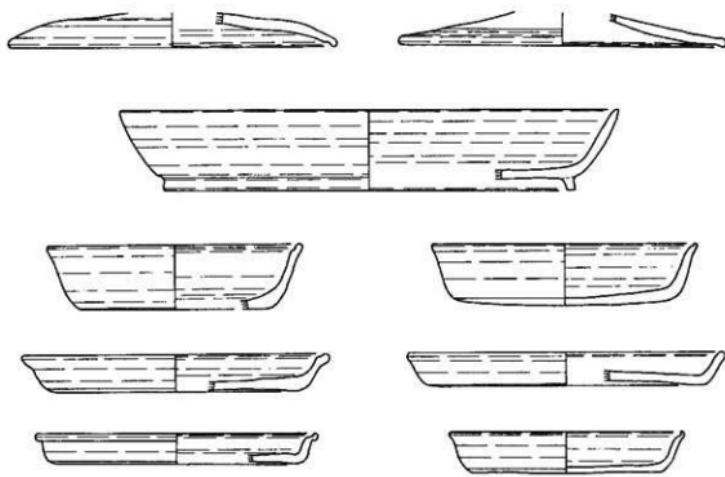
資料的に最もまとまっているのはSK2020である。土師器の杯蓋、杯、皿などがまとまって出土しており、内外面を赤色顔料で塗装するものが多くみられる。口径は10cmを大きく超えるもので占められている。また口縁部内面に沈線がみられ、底部外縁はナデによって成形されている。皿は口縁端部が外反して仕上げられるものもみられる。杯、皿類の内面などにヘラミガキによる暗文はみとめられないため、SK2020の年代は8世紀末頃に収まると考えられる。その他にSE3001、SK3158、SP3012などの遺構が該当すると考えられる。出土した遺物は土師器の杯、皿類が主で、その他には須恵器の蓋、壺などが単独に近い形で出土している。これらの上器はSK2020よりもやや古い様相を示すため8世紀半ば頃の可能性が考えられる。また破片ではあるがSA3012の柱穴より出土している杯蓋もこの時期と考えられる。

(b) 9世紀初頭の遺構（第17図）

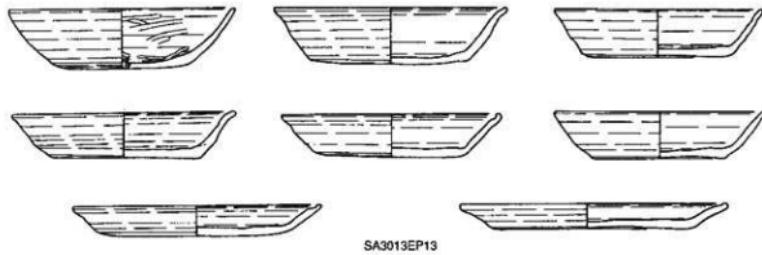
SA3013EP13の出土資料を標識とする一群である。ここでも出土した土器は杯、皿類で占められており、内外面を赤色顔料で塗装するものが多くみられる。口径は皿が15cm前後の径を維持しているのに対して、杯は12cm前後と縮小して小型化している。口縁部内面の沈線も弱くなっている。口縁端部の外反もほとんどみられなくなり、かわって杯、皿とともに直線的に開きながら立ち上がる傾向を見せる。底部の調整も回転ヘラ切りによる調整で占められるようになっている。その他の遺構としてはSA2009、SP2113、ST2003、SA3029などの遺構が該当すると考えられる。

(c) 10世紀代の遺構（第18・19図）

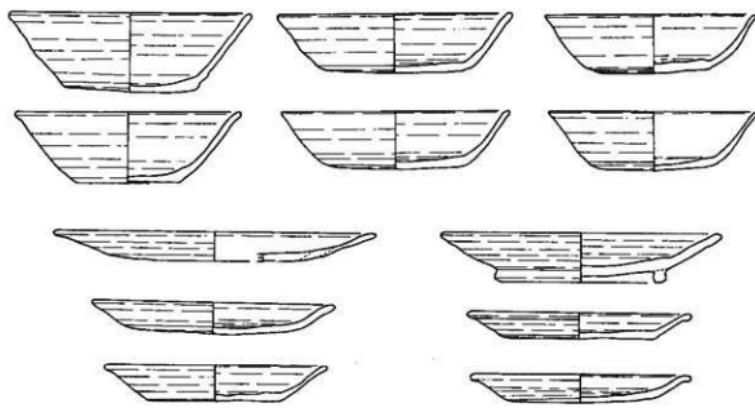
ST2001、SA3025、SA3031、SK3032、SP3688、SP3855などの遺構が該当すると考えられる。この時期も土師器の杯、皿類に偏って出土する傾向がみられる。他には黒色土器B類の椀が新たに組成して



第16図 8世紀代の土器

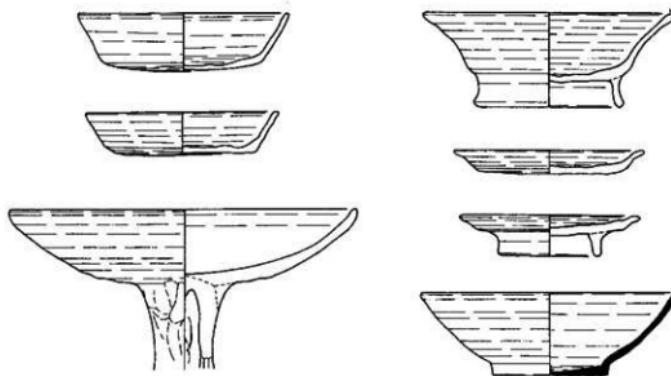


第17図 9世紀代の土器



SD3029

第18図 10世紀代の土器(1)



土器満りNo.14

第19図 10世紀代の土器(2)

くる。土師器の杯は形態にバラエティーがみられるようになり、器高が高く大型のものも出現していく。体部の立ち上がりも直線的に聞くもの以外にも、わずかに外反するものや内湾するものなどもみられる。また底径が縮小して高台がつくものもある。皿は口径が12~13cm前後に縮小し小型化する。体高は短く、外反する傾向がみられる。杯、皿とともに底部は回転ヘラ切りが用いられている。SD3029も他時期の混じりはみられるが主体的な時期は同じ10世紀代と考えられる。またより新しい様相としては土器満まりNo14の一組が考えられる。皿類は小型化が進み11cm以下の小皿が多くみられるようになる。また高台付の小皿も一定量組成する。体部が丸みを持つ高杯や橢型の須恵器の存在などから10世紀末~11世紀代の年代が考えられる。

(2) 堀立柱建物群について（第21・22図）

古代に所属すると考えられる堀立柱建物群は南端の1999年度2-1、2-3区（南群）と北端の2003年度4-3、4-4区（北群）、2003年度3-3区（中央群）の3カ所を中心として存在している。建物の主軸方位は南群、北群ともに真北より西へ約10度前後傾くものが主体である（表8）。また出土した遺物の年代についてもSA2009（中央群）、SA3013（南群）がともに9世紀初頭頃に位置づけられることから存続年代についても共通する可能性が高いと考えられる。ただし3カ所の建物群の中で南群に関しては他の2カ所と比べてあり方が大きく異なっている。

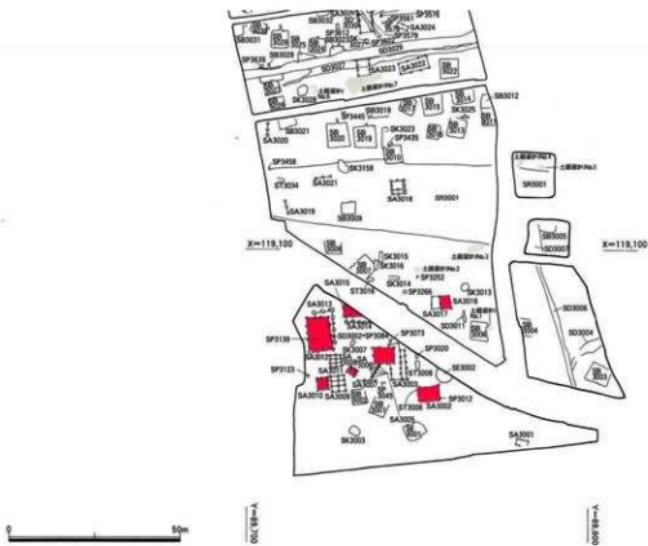
南群の特徴としては、まず第1に他の建物群に比べると柱穴の掘り形が大きな建物が存在していること、第2に建物同士が規格性を持って配列された可能性が高いこと、第3に同じ場所での立て替えがみられること、第4に住居施設（側柱建物）と倉庫施設（総柱建物）と井戸がセットになっていること、などが挙げられる（第20図）。またSA3012、SA3013の柱穴より出土した遺物から8世紀後半代と9世紀初頭の2時期の建物群の立て替えが考えられる。重複している側柱建物、SA3012とSA3013、SA3014とSA3015、SA3003とSA3004、SA3016とSA3017は4軒が1組となってそれぞれ同時存在していた可能性が高いと考えられる。総柱建物の3軒の内、SA3009とSA3010についても軒先の配置からみて同時存在が難しいので、2時期にそれぞれ存在していたとみられる。これらの建物群は井戸を加えると、およそ50m四方の方形の屋敷地を形成していたものと考えられる。屋敷地推定範囲内の造構から硬（SK3014）、土馬（SP3012）、木簡（SE3001）などの遺物が出土していることから官人クラスの人物の屋敷であったと考えられる。

(3) 敷地遺跡の文字資料について

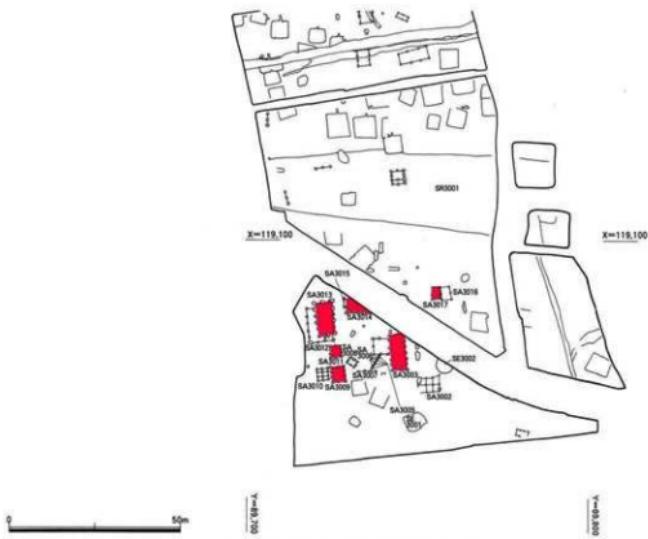
敷地遺跡からは奈良~平安時代にかけての文字資料が5点出土している。

(a) 墨書き器

SA3012EP13から1点（第166図9）とSD3029から1点（第861図60）がそれぞれ出土している。いずれも上師器の杯の底面に書かれたものである。第166図9は「左」と書かれている。柱の抜き取り穴に杯・皿類が重ねて入れられており、その1番下に納められていた。地鎮に伴う祭祀に使用された可能性が考えられる。第861図60は墨痕が確認できるが文字かどうかは不明である。



第20図 奈良～平安時代館跡(1)



第21図 奈良～平安時代館跡(2)

図版	番号	土器	器種	場所	内容
37	2	土師器	杯	外	不明
50	1	須恵器	杯	内	「×」?
60	1	土師器	?	外	不明
78	26	土師器	皿	内	不明
78	27	土師器	?	外	不明
78	28	土師器	?	内	不明
93	1	土師器	皿	内	不明
99	1	土師器	?	内	「×」?
103	1	土師器	杯	内	「田」?
166	17	土師器	皿	外	不明
176	1	土師器	?	外	不明
783	1	土師器	?	内	「×」?
847	6	土師器	?	外	「×」?
857	13	須恵器	蓋	外	「×」
861	43	土師器	杯	外	不明
861	59	土師器	杯	外	「田」?
938	70	土師器	皿	内外	「井上彌・川入」他
938	71	土師器	皿	内	不明
938	72	土師器	?	外	不明
938	73	土師器	?	内外	「×」?
938	74	土師器	?	外	不明
938	75	土師器	蓋	外	「×」?
970	10	土師器	杯	外	「井」?
978	16	土師器	杯	外	九字切り
1008	14	土師器	?	外	不明
1008	15	土師器	?	外	不明
1008	16	土師器	?	外	不明
1008	17	土師器	?	外	不明
1008	18	土師器	?	内	不明
1012	9	須恵器	蓋	外	「子」
1012	10	須恵器	蓋	外	「×」
1013	17	土師器	杯	内	不明
1016	9	土師器	皿	外	不明
1017	19	土師器	?	内	不明
1017	20	土師器	?	内	不明
1017	21	土師器	?	内	不明
1017	22	土師器	?	外	不明
1020	19	土師器	杯	外	「×」
1021	27	土師器	?	内	不明
1035	46	土師器	杯	外	「×」
1043	15	土師器	皿	内	「×」
1043	16	土師器	皿	内	不明
1052	7	土師器	杯	内	不明
1052	8	土師器	杯	内	不明
1053	16	土師器	皿	外	不明
1053	17	土師器	皿	外	不明
1054	26	土師器	皿	内	「田」?
1054	30	土師器	?	外	「×」
1060	6	土師器	皿	内	不明

表2 敷地遺跡出土刻書土器

(b) 刻書土器（表2）

一部傷痕と判別のつき難いものも含まれているが、古墳時代のヘラ記号入りの須恵器を除けば49点を図中に掲載している。その多くは「×」などの記号が主であり、一部に「千」、「田」などの文字と考えられるものも出土している。その中でも注目されるのは第938図70の土器である。皿の底部内外面に刻書が行われており、外面に「井上郷川人」「井上川（家）？」と記されている。内面には「前」を含めて他に3、4文字が刻まれているが内容は不明である。外面に記された「井上郷」は名方郡井上郷を表すと考えられる。寛平8年（896年）の太政官符によって名東・名西の2郡に分割された後は、名東郡に属している。「和名抄」によれば「井乃倍」と書かれている。長岡京跡出土木簡に「阿波國名方郡井上麻」があるのが初出である。諸説があるが現在の徳島市国府町の旧南井上村付近を比定する意見が有力である。「川人」は一部逆文字となっているが、人名を指すものと考えられる。古代阿波の氏族に川人氏を見いだすことはできないが、久安2年（1146年）7月11日の河人成後等問注申詞記（愚昧記仁安二年冬卷文書）に一宮河人成高とその子弟成後の名を見いだすことができる。現徳島市国府町延命付近に存在していたと考えられる「延命院」との間の訴訟事件が発生しており、ここに見られる「河人氏」も名方郡に関連のある氏族といえる。刻まれた土器の年代が8世紀代のものであり、400年近い時間差があるため、両者を直接結びつけることはできないが今後関連資料の増加を期待したい。

(c) 木簡

SE3001（井戸）内より1点出土している。記載内容は、「勝浦 板野 麻植 那賀」と古代阿波の郡名を列挙した内容である。注目されるのは「那賀」と「勝浦」の両郡が併記されている事である。長岡造の支配領域を基盤として成立したと推定されている「長岡」は大宝令（701年）以後、そのまま「長郡」へと引き継がれたとされている。その後の笠置元年（715年）の郷里制の施行前後に「長郡」は「那賀郡」へと表記を変え、同時に北部の「勝浦郡」が分離されたと考えられている。木簡は井戸の年代が8世紀後半から9世紀初頭頃が考えられることから、「勝浦」郡の表記例としては最古級の資料と考えられる。

(4) 土壙墓について（グラフ8）

敷地遺跡の調査において最も多く検出された遺構の一つにST（土壙墓）がある。いわゆる平面形状が隅丸長方形をした土坑を一括してSTに分類しているが当然すべての遺構を墓として認識できるかどうかなど問題点も多く存在している。敷地遺跡で土壙墓の作られた始めた年代は古墳時代後期以降であり、その後古代、中世にまで継続すると考えられる。大半の土壙墓は水田面の下の遺構層で検出されるため、当初は水田造成前の時期（7世紀～8世紀前半頃）に所属するのではないかと考えていたが、STの主軸方向が水山の駐車と重なったり、あるいは駐車に沿うようにして形成されるものが多く見られること。それは古代の掘立柱建物群ともその方位とも一致するので、その大半は8世紀後半以降のものであろうと考えられる（表9）。また副葬品の伴ったST2001などは遺物の年代から10世紀代であることがわかるため、少なくともこの時期までは確実に農地として利用されていることがわかる。県内の長方形土坑を集成した大橋育順はこの種の土坑について4つの定義を挙げてまとめている。①平面形状が長方形または隅丸長方形であること。②断面形状が長方形または逆台形であること。③遺構内埋土に上層由来の土層と地山由来の土層とが交互に堆積した状況が観察できること。④副葬品がないこと。以上の

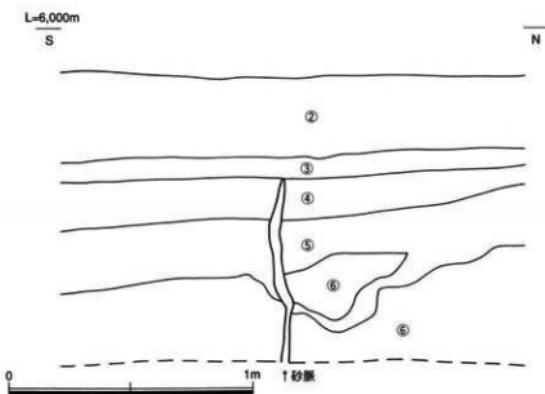
条件を記しているが、③、④の条件に関しては細分条件となるため分類に問題を残している。また対象を弥生時代から中世までと広げすぎたため、各時代の墓制との関連においての記述にまで踏み込むことができず論点が散漫になってしまっているところがある。ただし大橋の着目した配列パターン、縦列型（A類）と並列型（B類）の組み合わせた分析による視点は条件付で有効と考えられる。特に敷地遺跡においては地形および条單によって規制されたと考えられるSTの配列状況がみとめられる。これらの調査成果に、①集落の景観、②集落を構成する集團（階層・家族など）、③造構が該当する時代の墓制、などの分析視点を加えることによってはじめて具体的な記述が可能になるだろう。

4 敷地遺跡における地震痕跡（第22図・写真1）

1998年度6区及び5-2区にかけての造構検出面及び調査区壁面において地震に伴うとみられる噴砂の痕跡が確認された（氏家1999）。噴砂と堆積土層の関係について改めて説明をしておく。噴出カ所周辺の土層は上から、①表土、②近現代整地層、③オリーブ褐色砂質土層、④SR3001埋土1、⑤SR3001埋土2、⑥黄褐色砂質土、⑦砂層の順に堆積が認められた（第21図・写真1）。6区においての造構検出面は③層の上面が第1造構面、③層の下部（⑥層の上面）が第2造構面となっている。噴砂は現地表面下約2mに存在している⑦層の砂を供給源として噴出しており、砂脈の幅は2~4cm前後となっている。噴出の途中で⑥層を押し上げるようにして亀裂が入っている。砂脈はSR3001の埋土を貫通して③層上面にまで達していることが調査時に観察できた。堆積する各層の年代をみていくと、SR3001とした疊地状の地形から掘り込まれた造構は古墳時代中期末（TK47併行期）の堅穴住居が存在しており、その埋没後からSR3001の埋土の堆積が始まっている。SR3001内より出土した遺物は古墳時代のものを除けば、8世紀代の遺物を中心で遅くとも9世紀頃にはほぼ埋没が進んだと考えられる。問題となる③層は9世紀以後に形成されたと考えられるが、③層上面で検出されている水田やその他の造構の年代を検討してみると9~15世紀程度の幅が想定される。砂脈は③層によって削平されているので、15世紀代以後とは考えられないが、水田が經營されているある時期に噴出した砂の拡がりは耕作によって土壤化したいったものと考えられる。決論的にいえば前回推定した年代（8~10世紀の間）よりもやや年代が下った9~15世紀の間に噴出年代を想定することが妥当であると考える。これは徳島県下において記録されている地震を想定するならば、仁和南海地震（887年）、康和南海地震（1099年）、正平南海地震（1361年）などが知られており、そのいずれかに該当する可能性があると考えられる。

参考文献

- 藤川智之1992「須恵器から見た徳島県後期古墳の一侧面」『真朱』創刊号
(財)徳島県埋蔵文化財センター
氏家敏之1999「敷地遺跡検出の噴砂」『古代学研究』第145号 古代学研究会
苔原康夫1999「徳島県下の遺跡にみる地震の痕跡」『古代学研究』第145号 古代学研究会
三好昭一郎監修2002「徳島県の地名」 平凡社
栗林誠治2004「古墳時代小結」『四国縱貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』24
(財)徳島県埋蔵文化財センター
藤川智之2004「大柿遺跡出土須恵器の型式分類と編年」
『四国縱貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』24
(財)徳島県埋蔵文化財センター



第22図 1999年度6区西壁にみられた噴砂痕跡

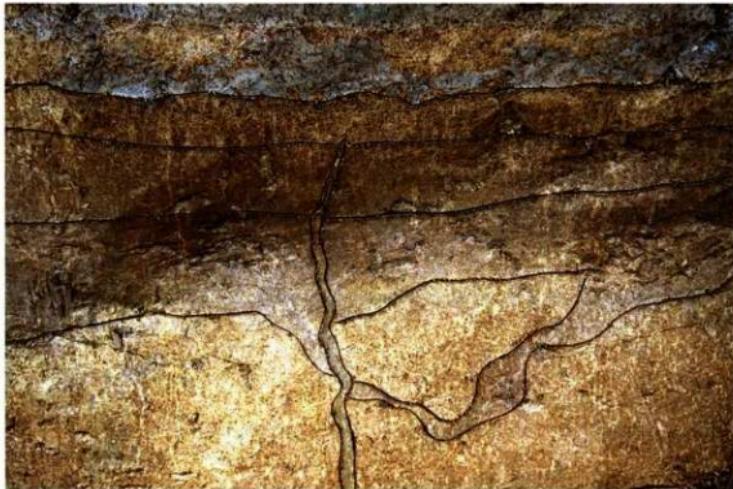


写真1 検出された噴砂痕跡

大橋育順2006「吉野川流域の長方形土坑について」『真朱』第6号

(財)徳島県埋蔵文化財センター

田川 恵2006「大柿遺跡におけるカマドの構造と変遷について」『真朱』第6号

(財)徳島県埋蔵文化財センター

報告書抄録

ふりがな	しきじいせき いち
書名	敷地遺跡（I）
副書名	道路改良事業（徳島環状線国府工区）関連埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	徳島県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第72集
編著者名	植地岳彦・氏家敏之・白石純・辻伸仲
編集機関	財團法人 徳島県埋蔵文化財センター
所在地	〒779-0108 板野郡板野町犬伏字平山86番2号 TEL 088-672-4545
発行年月日	平成20年3月25日

所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
敷地遺跡	徳島県徳島市 国府町敷地他	36201	34度 04分 27秒	134度 28分 11秒	(平成10年度) 1998年5月6日 ～1999年3月25日 (平成11年度) 1999年4月23日 ～2000年3月21日 (平成15年度) 2003年5月16日 ～2004年3月19日 (平成18年度) 2006年10月10日 ～2007年1月29日	(平成10年度) 6,487m ² (平成11年度) 6,719m ² (平成15年度) 13,414m ² (平成18年度) 1,740m ²	県道徳島環状 線改築に伴う 発掘調査

所収遺跡	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項
敷地遺跡	集落 官衙 生産	古墳時代中期 ～後期 奈良時代 平安時代	堅穴住居 掘立柱建物 土坑 土礫墓 小穴 水田 溝	土器（土師器・須恵器・黑色土器） 土製品（土鍤・瓦） 石器（敲石・砥石） 鉄器（鉄鎌・紡錘車・刀子・鎌） 木製品（木簡・柄・刀形木製品）	郡名を記した 木簡や地名などを記した刻 書土器などの 文字資料が出土 する。

要約	吉野川と船喰川に挟まれた沖積地上に形成された遺跡である。弥生時代終末～中・近世までの長期間にわたる遺物が出土しているが、中心となるのは古墳時代（後期）と古代（奈良・平安時代）である。古墳時代は堅穴住居を中心とした集落が形成されている。古代になると掘立柱建物を中心とした館跡が検出されており、近接する国府との関連が想定される。またその周囲では水田開発が行われている。
----	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第72集

敷地遺跡（I）

道路改築事業（徳島環状線国府工区）関連埋蔵文化財発掘調査報告書
《第2分冊 本文編2》

発行日 平成20(2008)年3月25日

編集 財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
〒779-0108 徳島県板野郡板野町大伏字平山86番2
TEL (088) 672-4545 FAX (088) 672-4550

発行 徳島県教育委員会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

印刷 徳島県教育印刷株式会社